婦人運動

第7卷　第2號



二月號

職業婦人社發行

文藝創作講座

第二號

内容

（一月二十五日配本）

文藝創作講座は第一號を配本するや、會員諸君の熱烈な好評を以て迎へられた。締切後にも多數の入會希望者があるので、特に本誌讀者に限り申込に應ずることにした。即刻入會されんことを。

内容見本進呈。

會費一ヶ月七十錢（入會金參拾錢）
全期七圓（入會金不要）

麹町區内幸町 大阪ビル二階　文藝春秋社　振替東京 一七六〇三

内務書記官 坂千秋著

比選と婦選

最新刊

四六判上製
定價金壹圓
送料十八錢

比例代表!! それは國民の意志を如實に國會に反映せしむる選擧方法である。國會は國民總意の反映であらねばならぬ。比例代表を採用せよ!

婦人參政權!! 國民の半數は女性だ。半數を政治圏外に放置して何の國民の總意だ。婦選をモダンガールの空論とのみ嘲笑する勿れ!

比選と婦選、この二つこそ政界淨化の捷徑でもあり、時代は將に此く動きつゝある。先覺者を以て自任する人々よ。本書について其の本質と内容を精査探究せよ。

◇目次◇

東京京橋加賀町
振替東京十三番
帝國地方行政學會
大賣捌 東京銀座 東海堂

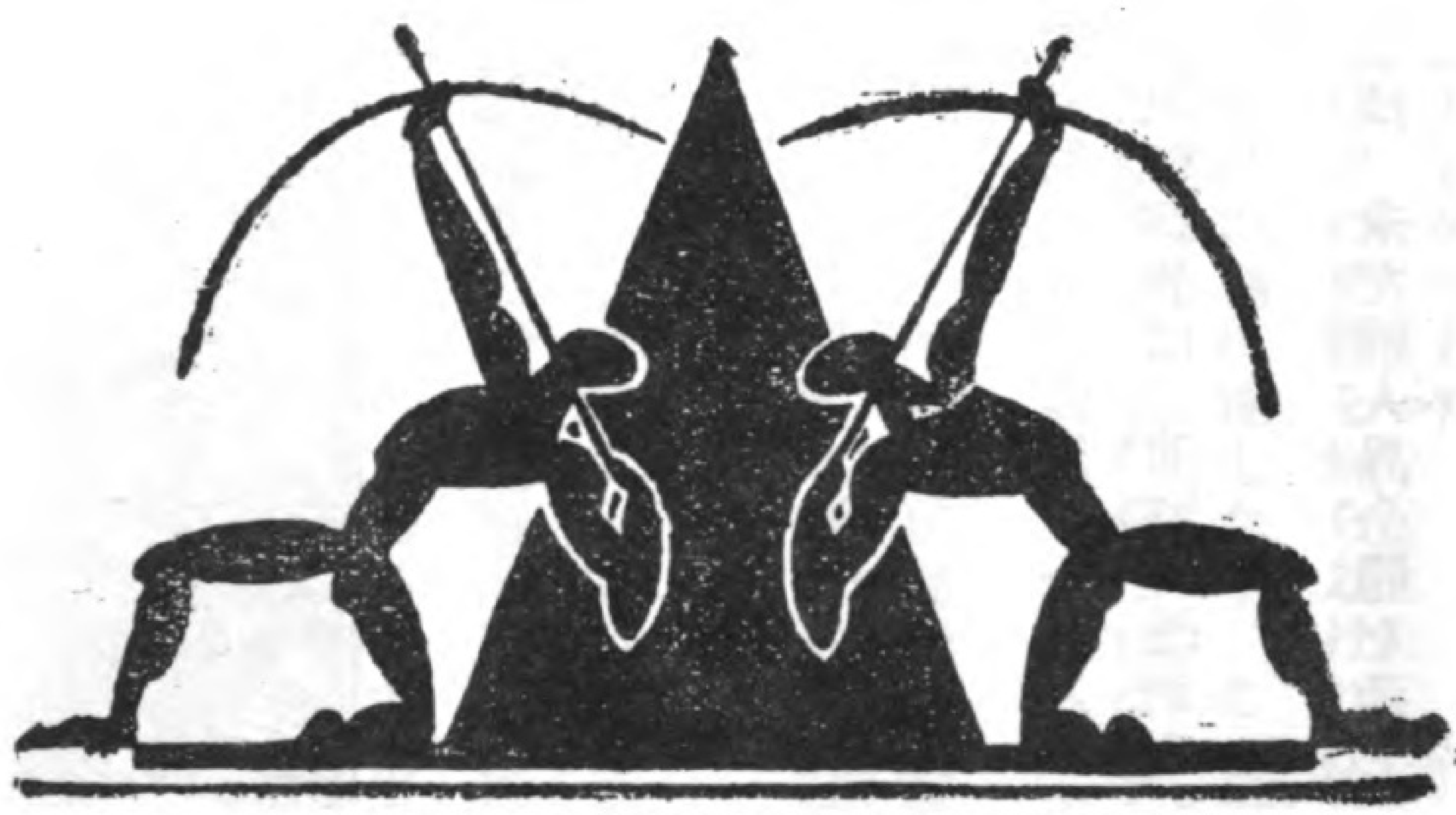
婦人運動

二月號 第七巻第二號

目次

婦人運動

第七巻第二號





公民權を婦人は要求する！

われらに公民權を與へよ。

たゞ、婦人として生れ合せて來たといふそれだけの理由で、われ〳〵は公民としての權利を奪はれてゐる。何といふ不合理だ！

婦人を社會構成の一員としてみとめず、又、國家的にも、國民の一員として當然なる資格を與へずに、家畜や廢人や罪人や未成年者と同列にしか扱はうとしない現行法令は、速刻に改正されなければならないものである。

内務大臣望月圭介は、「婦人の公民權要求の叫びは、未だ婦人界全體を通じての聲であるとは考へがたい。それ故に時期尚早と云ふべきである。」と云つてゐるが、われ〳〵は、その時代の趨勢に盲らな謬つた考へを詰る前に、彼等がいつまで支配者としての勝手な夢に眠りこけてゐるつもりか、その愚かさを嗤つてやらうでないか。

公民權の如き——結社權及び參政權の如きも勿論同樣である！——かくも同然の婦人の權利を今日までわれ〳〵

の前に阻んでゐた、その不合理をなほ反省しないばかりか、爲政者として自分たちが、これを婦人に與へるも勝手與へざるも又意の儘、といはぬばかりのこの獨りよがり！　を飽くまで、われ〳〵は排撃しなければならぬ。全て今日までの政治の腐敗墮落行詰りは實にかういふ處から來てゐた。

今こそわれ〳〵はこれを――この支配者の專斷及びその正體を知らなければならぬのだ。殊に、婦人としてのわれ〳〵は、政治的にも　社會的にも、經濟的にも行詰りの極に達した今、この機會に長い間奪はれてゐた當然の權利をとり戻して、明日の新社會の建設のために勇敢な協勞者として起たねばならぬのである。

一體、婦人であるといふ性的差別が男子が自由に行使してゐる公民權や參政權を與へない理由として如何なる根據をもつものであるだらうか。むしろ、われ〳〵は云ひ度い。婦人ほど社會的に有用な仕事を擔當してゐる者はない、と。

今日、家庭にあつて家事にいそしむ主婦の重要な働らきを無視する者があらうか。子供の養敎育に專念する母のあの沒我的にして限りもなく強い愛を見ないものがあるだらうか。職業市場の婦人をみよ。纖手よく一國の工業を支配して、女子工場勞働者がわが國の產業上に大きな働きをあげてゐるのであり、又、近年、年を逐うて激增するばかりであるところの職業婦人のはたらきも、學校に、官省に、商店に、會社に、電車、自動車に、病院に、劇場に、新聞雜誌に等々、無視することの出來ぬ重要な分野を占めて今日では拔くべからざる地歩を婦人は固めつゝあるではないか。殊にみのがすことが出來ぬのは農村婦人のはたらきである。農村に於て婦人が家事、育兒、姻戚のつきあひ、等々煩はしく忙しい仕事の上に三重にも四重にも負擔してゐるところのあの激しい農業勞働をみないでゐられる者があるか。農村に於ては農業勞働、養蠶を初めとして繩なひ、むしろ作りの家庭副業に至るまで婦人の方が遙かに多く困難な仕事を負擔して、それで漸く生計は維持されてゐる狀態である。

斯うして婦人が、娘も、妻も、母親もみな重要な働き手として撓まず働いてゐるのにもかゝはらず、國家は、この婦人のはたらきを社會的にみとめやうとしないのである。母のはたらきを認めないのである！ 何といふ國家的にも社會的にも致命的な謬りであつたらう。

婦人にも公民權を與へよ。

實に公民權は、男子と共に婦人も亦當然にもつべき權利である。權利であるばかりでない。義務である。婦人が社會人として、國家の一員としてその當然に負うべき義務を果たしてゆくには缺くことの出來ぬものである。

從つて私たちは思はねばならぬ。婦人界が公民權を要求するにあたつて、ときの權力者階級に歎願して彼らの同情と好意に縋りてこれを投げて貰ふべき性質のものでは決してないといふことを、飽くまでも示威と鬪爭に依つて全ての婦人がこれを要求してゐる、といふ現實が示す偉力を以てこれをたゝかひ取るべきであるといふことを。

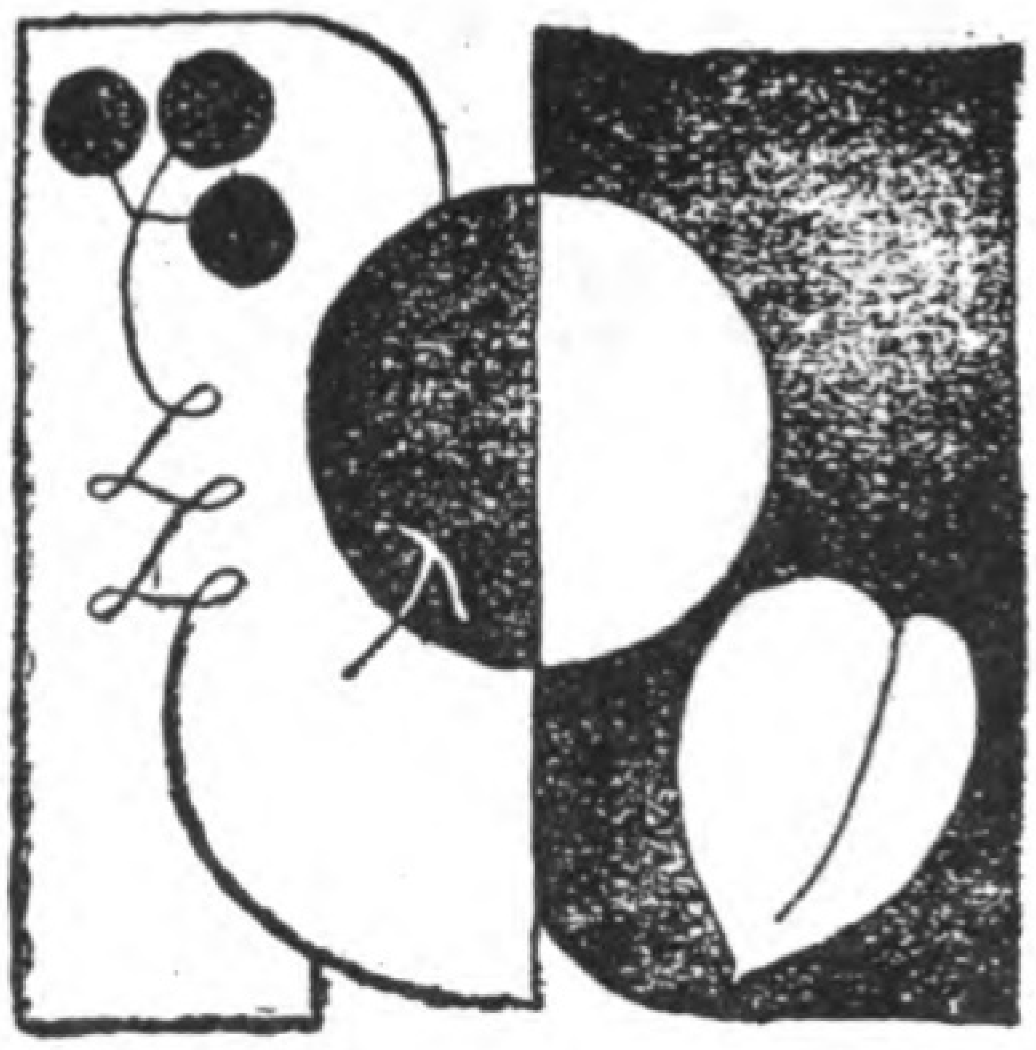
婦人界がその極めて當然なる權利——公民權、結社權、參政權の如き——を獲得するにあたつてさへ、歎願と叩頭で上からこれを與へて貰ふ屈辱的な態度に出るか、示威と鬪爭を通じて自らの力でこれをたゝかひ取るか、この二つの道の相違は、やがてこれらの權利を現實に行使するにあたつて天と地の差異を結果に於て生ずるものであるから、われ〳〵は今の內から充分警戒しなければならぬ。

婦人の威力を示せ。

われらの公民權を奪取せよ！

婦人の主張を市會に
—公民權なくとも反影し得る—

片山哲



□

婦人の政治的社會的法律的地位を向上せしめることは、我日本に於て最大の急務である。諸ゆる時機を狙つて、その目的のために進出しなければならない。本年はこゝに三つの好時機が與へられたことを、もつけの幸ひと考へ果敢に突進する用意を怠つてはならぬ。

その第一は一月二十二日から再開せられる第五十六帝國議會である。普選後正式に開く議會はこれが、はじめてである。第二は、三月三日に擧行せられる東京市會議員の總選擧である。醜惡其の極に達したる東京市會が解散せられ、普選による更新の市會總選擧である。第三は來る四月五日の交に開かれる全國的市町村會議員の普選による總選擧である、この中には大阪市の如き大都市の選擧から、大小市町村の自治制議員の總選擧で、我國全般にとつて大いに意義のある選擧である。以上の三つの好時機に、婦人の地位向上のために如何に働きかけるべきか。如何にして其實蹟を擧げ得べきか、今から準備を怠らぬことが緊要である。

□

第五十六議會に直面して大體下の問題が出るであらう。

一、普選法の改正　これは男子の二十五歳を二十歳とせよと謂ふ主張と女子にも男子と同樣に選擧權被選擧權を與へよといふ主張とである。無產政黨は一致して之を主張するが恐らくは多數を占むる既成政黨はこれを賛成せぬであらうから、殘念ながら今度は通過の見込がたゝぬ。

二、婦人公民權の問題　政友會は非常に苦まれてゐる、人氣が惡くなると、その人氣挽回策として婦人參政權をもつてくる。しかしそれは何處まで誠意があるかわからない故、實行期に這入ると、何時もお流れになる。今度の婦人公民權の主張も與黨では昨年の春頃から唱へてをつたのであるから、いくら內相が反對だといつても、さうそれに盲從する樣なことがあるまい。これは婦人方自身の自覺と猛運動を起して當局に其不當をなじり實現を迫るべきであらう。もし五十六議會で婦人公民權が認められゝば、たしかに一般婦人參政權も促進せられること疑ひない。

三、女子政治結社加入の自由を認めること　これ治安警察法の一小部分の改正である、そんな箆棒な法律が何處にあらうか。これは制限議會でも問題になつたのであるから、今度は如何してもこれを通さなければならぬ。法律を以て不當に個人の政治的自由を剝奪してゐることだから、立憲國に於て勿論許さるべきことでない。無產政黨は擧つてこの改正を主張する筈である、既成政黨も論理上之を拒否すべき根據をもたぬ故、通過し得る自信をもつてゐる。

其他廢娼問題、禁酒法改正問題等がある、特に廢娼は福島、埼玉等其他二三縣の縣會を通過してゐる問題であるから議會の問題として、封建的人身賣買の惡制度の撤廢に努力しなければならぬ。要は婦人の政治的自由を充分に獲得せしめ男子と共に手をとつて特種特權階級が勝手にしてゐる政治機構の合理的改正に猛進するにある。

□

東京市會議員總選擧に直面して婦人は蹶起して、それぞれ要求する主張の貫徹に努力しなければならない。婦人公民權のなき悲しさに婦人自身を壇上に送ることが出來ないけれど現在我々が推薦せんとする人々は民衆の意思を代表して立つのであるから、明白に男女勤勞階級の代辯者だと謂ひ得る。私はこの點に於て無產勤勞婦人の共鳴を得ることを確信し、新市會に對し、一新面を開くこと必定なりと思つてゐる。從つて我々が推さんとする人々は（未だ何人なるかは確定しないが）左記の如き事項を高唱し其實行に努力することを豫め約束するものである。

（一）　まづ立場を明かにすること。今迄の市議は勝手氣儘なことを謂つてをつても、それは皆個人の主張であつたり、又其の人間に金を出してゐる會社とか富豪とかの代理を勤める

に過ぎなかつた。従つて彼れは市民の利益を無視しても、金を出した會社の利益を計らうとする立場にあつた。それだから、あの様な醜い瀆職事件が起り半數まで收監されたのだ。それで我等の代表者は、まづ「私は民衆の代表として勤勞無産者の利害を代辯して立つものだ」といふ誓約をせしめなければならぬ。當選した後でも勝手氣儘なことは斷じてせしめない組織力をもつてゐなければならぬ。民衆に基本をおかない所謂名士は自己の地位能力によつて勝手な眞似をする故、それが果して民衆の幸福になるや疑はしい。否私はかゝる名士は結局特種階級の代表者に終るものなりと斷じて差支へがない。

(二) まづ市議としての政見を發表し、その實行を誓約せしめ、且つ選擧民一般民衆は其實行を監視しなければならぬ。監視してゐないものであるから、彼等既成市議は甲の團體から乙の團體へと、金につられて流れ行くといふ始末である。

(三) 其政策は總て勤勞無産者の福利を増進する政策であることを必要とする。東京市には昭和四年度歳入歳出豫算約二億七千萬圓であるが、この金が何處から這入つて何處にそれが使はれてゐるか、今迄の東京市民は恐らく殆んどこれを知らなかつた。たゞ市理事者とこれを自由に操つてをる醜市議のみがこれを知つてをつたに過ぎない、知るばかりではない不當支出が山ほどあると謂ふに至つては、全く沙汰の限りではないか。そこで、我等はまづ市歳入歳出の整理を斷行し勤勞者に對しては減税し、遊んで居つても喰べられる有閑有産階級には適當な負擔を爲さしめることは、當然のことであらう。税制の整理、市債の整理を斷行して、然る後歳出方面の問題に移つて行かなければならぬ。元來自治政治は社會施設の徹底に最大の努力を爲すべきは當然である、即ち民衆の衣食住の問題に就き細心の注意を拂ひその方面の政策に對し、それ〴〵具體案を練るべきであるが、今迄の市議連中はそんな頭もなければ又左様な誠意をもつてゐない。衣食住安定のために政策を定めるべきで、その内容は澤山ある故一々これを玆に擧げることが出來ぬが、まづ二三を例示して見やう。

(1) 住宅政策　東京市民の七倍は借家住ひであつて、家主と借家人との間には常に借家爭議が絶えぬ。結局の處、家賃が高い様である、裁判所は爭ひが起つた後で問題を解く役目をもつが事前にその爭ひを防ぐことは出來ぬ、誰が爭議防禦をやるかと謂へば、まづ市がこれをやるより他に方法がない。

獨逸では以前から、家賃制限令を作つたり、家賃公定表を作つたりしてゐる。それのみではない市營住宅の建設のために列國がそれぞれ苦心且つ實施してゐることは顯著な事實である。之に反し我東京市の住宅問題は如何であらうか、左の數字がこれを示す。昭和二年十二月末警視廳の調べによれば、東京市及びその附近には木賃宿が四百軒ある、こゝに宿るものは一日一萬一千人、公設私設の不完全な宿泊所が三十個所あるがこゝに宿るものは一日二千五百人、その外野宿するものが一日八百人、小屋に臥るものは百五十人も居るといふことである。もし三輪のトンネル長屋などを調べれば、思ひ半ばに過ぐるものがあるではないか。

大正十五年中に東京府管内の藝娼妓紹介業者二百六十人の手を通じて賣られた女はたいてい長屋、木賃宿、小屋住ひの中からであり、五千何百人の小娘が泥の中へ投げ込まれたといふ事實である、これと謂ふのも、住宅政策が餘りにも放任せられてゐる結果ではなからうか。

二、育兒教育問題

三、職業紹介問題と失業者問題

以上論ずべき問題が澤山ある。東京市政に就て論ぜし事柄は一般市町村政の上に之を採用せられなければならぬ。斯の如くして我々は市政自治政が民衆の生活意識の反射機關たらしめるとに依つて、はじめて利權の渦からそれを取戻すとが出來る、衣食住の問題は無産婦人にとつて直接必要な議題たると問題である。この好機會を逸せずして、公民權の有無に係らず、生活問題を論ずる市會は民衆環視の中に開かれなければならぬ理由に基づき、大々的に進出をなすべきであらう

(十五頁より續く)

た譯である。無産政黨並にその候補者よ。私共無産階級の女性の持つこの大きな期待の爲めにも、自重の上に自重あらん事をいのつてやまない。

又、婦人よ、たとひ現在に於いて、參政權を持たないからと云つて、この意義深き市會の選擧を監視する事を怠つてはならぬ。市會は私共の毎日の臺所と切り離す事の出來ぬ密接な關係にある事を自覺せねばならぬ。それがそもそも近き將來に於いて必ず公民權を得る爲めの一つの努力である事も知らうではないか。又それは、全女性の爲めの責任であると共にそれこそ市會淨化の一助である事を確信して筆を擱く。

(一九二九、一、一五)



私共は市會に誰を送るべきか

丸岡ひで

板舟權補償問題に依つて曝露された東京市會議員を繞る幾多の醜事件は、昨昭和三年の夏以來、帝都の各新聞に依つて毎日の樣に報道されてゐた。之に對する司直の手に依る檢擧の一石はめまぐるしい波紋を描いて、次は京成電車乘入問題次は江東青物市場使用料並に乘合自動車購入に關する贈收賄次は市長選擧に關する醜事件、等、等、實に矢つぎ早にその醜狀の曝露を見せた。

而もその容疑者として檢擧を見た者は代議士、市會議員、府會議員及市吏員に迄及び、腐敗の根源は一體何處迄根深くはられてゐるのかその停る所を知らないといふ狀態である。私共は憤慨や、なさけなさを通り越して只啞然たらざるを得なかつた。然しながら私共はこの未曾有の大疑獄をひき起した責任上、市會は當然首をたれて總辭職か、解散か、何れかに自決を見るであらう、そして市民の前に平伏してその罪を謝するであらうとかすかな期待を持つてゐたが、流石に厚顏な彼等は最後のどたん場迄、今では「市議」といふ言葉…「不正」の代名詞でゝもあるかの如く私共には感ぜられる、その名に噛りついて恥の上塗りを重ねてゐた。之を見た私共市民は之が我國帝都としてのプライドを持つ東京市民の代表者かと思ふ時、實に赤面の限りであつた。尤も「恥を恥と思はざれば恥かいたためしなし」の彼等なればこそ、思ひ切つてあれだけの不正事を重ねる事が出來たのではあつた。赤面すると同時に私共は斯うした醜市議を兎に角、帝都の市議として選出した私共の責任を強く感じなければならなかつた。市政

淨化を冀ひ、市會即時解散の輿論は喚起され、一方に於て東京市政調査會等に於いては市政問題對策協議會を主催し昨年十一月卅日右代表者として後藤伯、阪谷男は政府にその解散に關する建議をなす等、その停る所を知らぬ程醜惡を極めた市會も一般輿論に動かされて舊臘中つひに解散の運びとなつた。

斯うして解散された東京市會を私共は再び汚濁の中に投じてはならぬ。幸ひ、市民の市政淨化の意氣込みが相當に猛烈であるから來るべき東京市會選擧には、ゆめ、此の度の如き醜市議を送る樣な恥づべき失敗は繰り返すまいと信じてゐるが、今日（一月十三日、東朝）の新聞等で見ると、獄中にあるあの醜市議が再び候補者の名乘りをあげるとか、あげたとか報じられてゐる。何といふ言語に絕した彼等の醜さか。私共市民は、二度と彼等に見むきをする事さへも恥辱の限りである事を十分自覺してゐる筈だ。

來るべき選擧は三月の三日である。この日を前にして候補者の名前もだん／＼報じられ、一方に於いては例へば市會對策委員會とか、市政改革委員會とかゞ開かれて何れもこの機會に多年魔殿とされて來た市會の淨化を計らんとしてゐる。これ等の會をはじめとして一般市民も先づ第一に考へさせられるそして最も大切な問題は、如何にして市政を改善するかといふ事である。

之に就いては色々な改善策が澤山あるだらうがそれに就いては後日にゆづるとして、先づその前に私は何よりも必要なその前提條件として私共無產階級の生活、利害を最もよく代表する所の市議を送るべきであると叫びたい。よく新聞や雜誌で色々な人々が口を揃へて、人格高き市會議員を選べ、有識の士を擧げよ、誠實清廉の市議を送れと云はれてゐるのを見る。何れもが全部本當であり立派な意見で異議の申し樣のない譯である。然しながらいくら人格高潔の士であらうとも有識の士であらうとも、只それだけの條件に適つてゐるだけではいけない。たとひさう云ふ人であつても若し市民の大部分である私共無產階級の生活を代表する事が出來ないならばさういふ人を市會に送る譯にはゆかない。何となれば、大變卑近な例ではあるが、子供を亡くした親の心事は矢張り子供を亡くした體驗を持つた親でなくては本當に實感が出ない樣に、私共無產者の眞の代表者は矢張り無產者から出なければ本當に熱烈に吾々の利害を代表してはくれぬは必定である。

民衆の利害等といふ事は全く度外視されてゐた之までの東京市會をして、私共無産階級に立脚したものたらしめる事が現下の急務であると考へる。私共は名前や、肩書につられてはならない。たとひ學識に於いて少しは劣つてゐてもむしろ、今迄述べた様に無産階級者の方が私共にとつてはずつと力強い味方である。

次にはかういふ候補者も出るであらう。無所屬を標榜しつつ「吾こそは無産階級の代表者である」と名乘りをあげて打つて出る候補者をきつと今度も見る事であらう。若しこの人が東京市民の大部分から確信を持つてその無産階級の代表者である事が認められてゐるならば兎に角、さうでなくしてかう名乘る人達を私共市民が易々とかつぎ上げる事は危險を伴ふ。何故ならば、立候補の時は、得點の胸算用からしてかう聲明し、さて思ふ壺にはまつて市會議員の席暖まるや、利權の動き次第では、立候補の時に金科玉條とふりかざした無産階級の無の字も忘れて何時の間にか徐ろに敵の陣營にすまし込んでしまつたとする。歯噛みをして口惜しがつた所で私共は、其の責任の持つて行き所を知らない。只獨り、そして初めてその時になつて、自己の不明を覺るより他に道を知らない。若し之が無所屬でなくして、無産政黨の公認候補者であつて右の様な不屆千萬の場合、私共は直に黨に向つて手厳しく其責任を問ひ其の市議の處置を迫る事も出來る譯である。

更に現代の政治は全くの政黨政治であつて、中間的のものや、個人的のものは存續し得ない。たとひ存在したとしてもそれは一時的のものであつて恒久的のものとなり得ない。何故なら、いくら人格者でも、又學識高き人であつても、個人の力では根深くはられた既成政黨の城壁はゆるがす事も出來ぬからである。底深く根を下してしまつてゐる既成政黨の根城に對抗し、肉迫して無産階級の利害を市會によく代表し得るものは、只に無産政黨といふ團結の力以外に何者もない。かうして述べて來ると、さて今度の市會に私共は誰を送るべきかは、容易にうなづける筈である。

申すまでもなく、私共の利害を代表する所の無産階級者であつて、而して、無産政黨にしつかり足場を置いた人を送れといふ事になる譯である。澤山の希望や、要求や改善策も先づかうした市議を送り得た曉の事でおそくはあるまい。この意味からして私は先づ、その前提條件として以上を述べ來つ

（十二頁下段へつづく）



農村婦人の生きてゆく道

奥むめお

農村で苦しい親の家計を嚙つてゐるのが堪らなくなつて、東京へ出て來る婦人が隨分多い。女工にうられて、工場の生活の少しもさきに光明が見えないのに堪らなくなつて飛び出して來る婦人も大分ある。

都會勞働者の問題は、都會に住んでゐる學者や、思想家や、都會勞働者自身に依つて宣傳もされ運動も進められて來てゐるに拘はらず、農村の問題は、殊に農村婦人の問題は、封建時代からの因襲が可なり根強く未だ〳〵植ゑついてゐるだけに、外から窺ひえない複雜性があるといはねばならぬ。

泥沼のやうに暗く重苦しい農村で、世間狹く、駄馬のやうに働き疲れて多産と、過勞と、營養不良の中に死んでゆ　農村婦人よ。それだけの人生であるならば、あまりに慘めすぎるではないか。

・因襲にまけるな。

都會の婦人の多くが、何らの生産的勞働に從事しないで寄生生活を送つてゐるのに反して、農村婦人は立派な生産者として働いて生きてゐる。生産者としてのこの强味をもつ農村婦人が社會的に全然埋沒してゐたのは、押さへつける因襲の力が實に大きかつたからだといはねばならぬ。

殼を破つて新しい戰ひの生活へ！

あまりに重々しい三重四重の殼ではあるけれども、それより外に生きる道がどこにありえよう。

飢ゑに泣くどん底

「或牛肉店の店頭から十歳ばかりの小娘が、鷄卵五個と鳥の骨を盜んで行くのを捕へて調べて



見ると、妻に逃げられ五人の子供を抱へて、飢ゑに迫つた車夫の次女で、營養不良の爲めに瀕死の狀態にゐる妹（二歲）を救ふ爲めだ」と云ふ事が解つた。

亦、愛國婦人會の隣保館で本所一帶の代表的な貧しい家庭に就いて調べて見た處、百戶の平均收支は「月收五十二圓二十八錢、家族五人、家賃十二圓七十錢」となつてゐて、一人當り一日の食事が二十六錢六厘餘、一食が九錢で賄はれてゐるとの事で、更にこれを一戶別から見た實際は一食三錢、それも一日三食を取れない家庭さへあるとの事である。云ふ迄もなくかうした事實は、巨大な都市の影に匿れた數限りもない存在のほんの九牛の一毛にも等しい一例に過ぎない。

都會と云へば、魔天樓のやうなデパートメントストアーを、ビルデイングを、光眩ゆいショウウインドウを、ダンスホールを、カツフエーを、モダンガールを、疾驅する自動車を聯想し勝ちな我々の頭は、その半面に前に擧げられたやうな事實が無數に增加しつゝある事を忘れてはならない。

市會議員の疑獄を對岸の火災視する市民も强盜の跳梁には心膽を寒からしめてゐるやうであるが、然しながらそれ等の事實は一つの都會、一つの國家を一聯の環として、深い聚りを持つてゐるものである事を考へてほしい。

都會の半面、一國の半面を脅かしてゐる飢餓を解決する鍵は、同時に市會議員の醜行を、爲政家の欺瞞政策を、資本家の横暴を處理する鍵である事を知つて貰ひたい。

さうしてその鍵は現在生活に脅かされ、その背後に飢餓の荒波が迫つてゐる一般民衆の社會的自覺、社會的共同責任感の覺醒によつて共同の立場から互に手を握り合つて、社會を、國家を、世界を、それ〴〵の一隅から改造して行く事によつてのみ、與へられてゐるのだといふ事を痛感すべきである。



當面の婦人運動に就いて

婦人が在來の生活觀念の中にとぢこもつてゐて、未だ社會的關心を持たないうちから、道を急いで勞働組合や消費組合や無產政黨等の組織に進んでも難かしいことだと考へる。婦人參政權の問題すら、一般の婦人にとつては、未だ何の係はりもないよその問題のやうに見える。で、私は、

第一に、婦人全般を通じ、もつと社會的關心、社會の一員として生きてゐることの自覺を常に持ち、而も徒らに公式的な高遠な理想を說かずに、個々人のあるがままの生活をとほして社會を見、社會を感ずるやうにしたい。

第二には、それぞれの職業や環境に從つて、例へば、勞働、職業婦人は勞働組合へ、家庭婦人は消費組合へ、而して一般無產者として婦人全體が無產政黨の立場を支持するといふ風に、婦人の全部層にわたつて組織化することにつとめたいと考へてゐる。

それについてお前はまづどうするか？　といふのだつたら、私は一人の家庭婦人として、而して母として――女の生活としては自分のやうに家庭に入り、妻となり、母となるのが最も一般的なありふれた生活だと思ふし、又、數からいつても一番多い生活だと思ふゆゑに、私にいつそう緣の近い、而して最もありふれた道から、一般婦人大衆が、協力提携してゆけるやうな道を、微力ながら開拓してゆきたい。

說敎强盜と新聞紙と密告

頃日の都下の各新聞紙上を賑はしてゐる所謂「說敎强盜」は、遂に警察當局を呆然たらしめ、一部の人々を恐怖させ、ある一部の人々には興味を持たれながら、その正體をますます謎の彼方へ隱してしまつた。

三宅やす子氏宅を襲ひ、下田歌子氏宅をも見舞つたそれは、その前後に出沒した說敎强盜と



は必ずしも同一人ではないことは明白であるが、斯くも幾人もの説教強盗が出現し、而も、この説教強盗が、以外にも多數の人々から憎しみのない人氣者として非常なる興味を持つて迎へられてゐる所以は、一つには新聞紙のジャーナリズム新聞經營の缺陷と影響に伴ふものであると思ふ。

わが國の新聞紙は啓蒙主義の過程を既に卒業し、今日ではアメリカ式な、資本主義的なニュース本位を重點とするにある。從つて、各新聞紙は同業社に卒先して自己の讀者により多くのニュースを報道提供するに苦心を要してゐる。が、然しながら、讀者の多くは未だ被啓蒙的な位置にあるので、新聞記者がその報道の中において不用意に表現した意見を何等の批判も試みずにそのまま輿論としてしまふ人々がゐる、幸か、不幸か、而して善惡を超越して言ふに、今日の人氣者の説教強盗も、實に、新聞記者が斯くの如き境遇に置いたのである。これは思想方面や政治政策にばかり沒頭して、斯る事件に冷淡で誠意なく、加ふるに無能なる警察當局者をやゆするために、新聞記者が茶目氣を出したであらう。

果せる哉、躍起となつた警察當局は、資本主義的ニュース報道に目のくらんだ一新聞社の不正な密告を、神の如く狂信し、失業者である所の良民を深夜さながら探偵物活動寫眞式の大げさな捕り方を演じ、母なく、貧ゆゑに毎日粥ばかりすすつてゐたといふ子供に、恐怖と悲痛を投げつけて、近來稀に見る深刻な人權蹂躪振りを行爲した。取調べの結果、その輕卒を只管恥ぢて不法手段を陳謝したことは滑稽であり、無權威である。がそれは、自ら招來したのだから誰をも怨む所がない。

然し、密告と同時に社會を嘘僞の記事で埋めて讀者を瞞着し、良民の名譽を毀損した不都合は、私どもの生活を脅かすものであり、今後、安閑と爲すことの出來ない事柄である。而して、この密告は見逃すには餘りにも重大な人道問題ではある。

宮原せい子氏



今日は長いこと火典の檢束を東北へのがれてゐたSさんが突然弟を訪ねて來て、一日山掃きを手傳つて下さると言ふので、弟と三人で早速出かけた。戸外に出るとゾツとする程霜風が身に泌みる。畑には眞ツ白な霜柱が朝陽に光つて、Sさんと弟の引いてゆく車の音が、冬晴れの朝空に反響する鐵瓶をさげた私の手は凍えさうに冷い。

山に着くと寒さのためにホツとする。手早く掻き集めた落葉に火をつけて、暫く三人で暖まつてから仕事に取かゝる。Sさんと弟は萱を刈る。私は刈つた後の落葉を掻きあつめる。 双手に力を入れて敏捷に熊手を動かす。

×ゝ歌を唄ふSさんや弟の聲に、ホツと息をつく被つた手拭の下にしつとりと汗が滲む。けれどなか〳〵はかどらない。三人がかりで三つの大籠に一ぱいにしたのは晝近い頃であつた。弟がそれを家に運んで行つた後、木の枝で作つた自在かぎに鐵瓶をかけ、火を焚きつけて簡單な晝食をする。

「自然の中にこそ、本然の人間生活があると言ふトルストイマンや、土の思想家達の言葉にもやはり半面の眞理があるやうに思ふね。」

「——さう。やつぱり私なんかも、都會生活から再び農民の生活に歸つて見ると、どうしてもそんな氣がしますの」

「しかしわれわれが、自然に即した生活こそ人間本然な生活だと思ふことは、彼の精神主義的トルストイマンや土の思想の讃美者達とは、まるつきり逆な、一切の階級制度が徹廢された理想社會を想像する原則的な考へであつて、やつぱり階級社會の存在する限り、われわれ貧農には斷じて自然美や土の思想に、何の感激も持てないからね。」

晝食を濟せたあとに、沸々とたぎる湯をすゝり乍ら、久し振りに話しは次々と展開する。

「しかしどんな未知の人でも、同じ思想を持つものは、話すとどこか共通する處があるね。さうした人に會つた時は實に嬉しかつたですよ」

感激深げに語るSさんの顏は、燃えさかる炎にうつつて健康さうに輝いてゐた。私達の周圍に續く山々の草木は、永遠に四季の變化をくりかへすのみであるが、その山に働く私達の思想や生活は年毎に同じ變化をくり返さない。暫らく話がとぎれて、ぢつと過ぎ行ける生活を省みれば、私の頭には恰度一年前の今日の日がハツキリと回想にのぼる……

帝都。歳暮賣出しの旗のひらめく中を流行の耳かくしにフエルトの足許も輕く、美しく飾り立てたショーウインドを、次々とのぞいてゆく百貨店の表裝の幾包かを重げに、タクシーを呼ぶ婦人、電車の軋り、自動車サイレン——其等銀座街頭の雜音の中を、歩いてゐた去年の今日——私は再び深い沈默にひたる。おゝ何たる激しい變化であらうか。

汚れた野良着につゝまれた手足は、勞働を語るべく節高く硬くなつてゐる。母の死によつて展かれた現在の生活は、はつきりと自己の姿を見出すと共に、爲すべき事をも敎へてくれた。力強いSさんの訓練が、ぐん〳〵私を現實に引づつてゆく。だが近き姉妹等をおもふ時、日暮れて道遠き悲哀を感ぜずには居られない。

「やらうよ」Sさんの聲に元氣を出して仕事にかゝつた。「三回目を詰み終へる頃はもう陽は沒して、夕闇と共に焚火の煙が、林の奥に低迷してゐた。歸路、鎭守の杜に兒等の焚く年の瀬のかゞり火が明るく梢を照らしてゐた。

楠瀬美春氏



私は農村婦人ではあるけれど農村の一般婦人の生活よりは隔たりのある生活を今してゐますそれでも以前はさうだつたのですし。今でもその臭みは充分ある筈ですから、昨年來の一日を思ひ浮かべて書いてみます。

今日は昭和三年の最後の日曜日だ、南國とはいえ、例にない小春日の様な暖さだ。いつに變らず祖母は、弟に車おさして日曜市へ野菜賣りに行かれるので、母は暗いうちに起き出で、まだ宵につけた里芋をこがれる。何度も何度も水をかへて、ごう〳〵音たて乍らこぎあげる。納屋の電燈の許で、いつぱい火を起してあたり乍ら、今こいだ里芋を今一度きれいに一ツつゞけずる。だん〳〵夜もあけて明るくなると、塀の裏に門戸の上に藁ぐらに草の上に霜がいつぱいだ、田に青いさいも一緒に、薄氷が張つた。皆起きて朝食、濟めば市荷つみだ。

日が出れば暖いものだ。元氣が出て、大根や人參の入つた大きな箱、蓬蓮草やニンニクの箱里芋の箱など、えんやとあれもこれも積み上げる。中で寒菊が一番多くの場をとる、桶や箱に立て水仙も香ふ。白南天松も積まれた。ぎいぎい綱でしばる、お辨當もほうちようも藁も入れた。東の橋のそば迄ついて行く。

市荷積む間に、しかけておいた小豆の火を時時見乍ら掃除にかゝる。

車を出したあとの取亂したこと。どこからしようかと惑ふばかりだ、掃除のあとは實にいゝ氣持になる。そのうち小豆も煮へて餡の仕上げにとりかゝる、餅米をむす、袋が古くてヒユツと顔に來る。ずん〳〵むせる。その間に母は明日の市荷の取り込みをせられる、午からつきはじめる、父が搗かれて母が臼どりをする。ボツタン〳〵きねの音は單調だ。田舍の年の瀨にはふさわしく。

やがてのし餅にせられ、おかゞみになり餡入りになる、母と姉と三人で隨分上手なまるめ方にくす〳〵笑ひ乍ら、お餅屋はこんなにしてある、とやつてみても出來ないものである。何度もつき、まるめて四時過やうやつと濟む。餡がよく出來たと賞め乍らみんなで味み、味みだのに數の多いことはをかしい。暖かゝつた日もかたむいた。又市荷にとりかゝる。

父は里芋をむしる、土のまゝなので皮を根をとるのだ。母や姉は蓬蓮草ひいたり、ニンニクとつたり、その赤葉をよくのけてざつと束にし冷たい氷の溶けた水、前の小川で洗ふたりするペンで書いてる程、さう早くは片づかないものだ。眞赤な手をして蓬蓮草の束をする姉、ニンニクもつり束にする。

馬の騷しいこと、草がほしいのかしら。父がはみをやられる。鷄が鳴くよ、今日も玉子を産んだのだらう、朝、餌をやつてから忙しくて一度も見に行かない。

例により受持ちの菊の束する、此の頃は色も少なくなり、赤に黄の二種類に白を一寸ばかりとりまぜて束にする。ゆつくりしてゐない、と束は出來ない。四五十束出來た。菊のもと一つかみづゝ熱湯に煮てさかさにし、澤山水をかけて桶にさす、水あげの夜業も濟んだ。新聞みたり本を一寸みたりしてから寢につく。

葉山曉子氏

×月×日

みぞれまじりの寒い日。歲前である。どかどかと來た近在の小作人たち、拧まづしい野良着と地下足袋。半年に餘る過勞のためにほうけた顏が、雨のためにより貧しくみえる。

「今日あ、お寒うござんす」

と出て來た地主である父。「どうだい。いつ迄持つて來んのだ」

「エヘ……すみませんなあ。旦那まけてくんなせえ」

「まけろつて？ 見に行つたら、上出來だつたで」

「上出來？ それからの雨に、穗をみんなやられてしまつて……」

「ぐづぐづ云はずに持つて來たらどうだい？」

「二割でもえゝ、まけてくんなせえ」

「まからんぜアヘヽヽヽヽ」「チェッ！」

數分間後よろい戸の蔭から、酒にとろんとした小作人らが小さな聲でつぶやいた。

「おふくろさん、今年は水ぢやねえなあ」――去年彼らの一人は、納米の日故意か偶然か酒でなく水をのまされたのだ――「アヘヽヽヽ」

「まけん方がお前さんらの德だ」いたちの樣に生血をすゝる地主、×はその娘だ。

「娘さん。うちの娘つ子は可愛相な顏をして朝から晚迄働いて居りますぜ」互物の樣にがんじやうな百姓のその目が、ギロッと光つた樣な氣がした。

さうだ。自分は彼等の目には樂しいいたちかたぬきとしかうつてはゐないのだ――

× ×

どこからともなく、押し寄せるしめつた空氣がたまらなく息苦しい。父は制度のかせを、親權のかせを、十重二十重に負つかぶせ樣とする。もう今日で何度目かの衝突だ。

「貰らうと捨て樣と、自分の娘を處分するのは親の勝手だ」

「自由が？ 愛が？ 思想が？ 何を生意氣な！ わしが行けと云つた所に默つて行けー」

呪はしき封建的家長制度――それは、田舍なるが故に殊更巾を利かしてゐる――の、犧牲となり終つて一生をみじめに暮す。私は嫌だ。どこ迄も反抗しやう。

× ×

現在のブルジョア社會内には、それ自身の否定の要素たるプロレタリアが存在してゐる。彼らブルジョアにとつて、プロレタリアの存在は恐怖であり、脅威であり、生活の存續を危くし生命をも奪ふところのがん腫である。されば國家機關及び權利を、その歷史的過程において掌握し、掌握した事によつて政治的支配者となり經濟的搾取者となつた彼等は、その權利の行使者たるところの政府及び、法律の力によつて伸び行く無產階級の若芽を、摘み取り無殘にも蹂躙してゐる。

今や資本家の攻勢、官權の壓迫は全く理性を失つた狂暴さを以て、無產階級の前に現れて居る。この壓制に被抑壓民衆及び女性はどれ丈苦しめられてゐることか？ 今日社會に、卷き起る階級對立、激化、それに伴ふ鬪爭の深刻さ、女性の男性へ對する反逆。かうした社會的矛盾、破綻の縮圖をそのまゝ私は吾が家庭に見出す。それは何か、卽ち封建的家長制度へ對する反對女性へ人形的、奴隸的存在の普通さを强要する舊思想への反對。小作人の搾取を正當な事と思ふ地主の父へ對する不滿憎惡の嫌惡感、――この思想の根本知相違を土臺として、起る兩者の對立、暗鬪、衝突！ そして私自身、自己の生活に對して大きな虛僞、矛盾を感じて居る。何故なら搾取者たる父の延長である私は、間接に

又搾取によつて生活してゐるのである。搾取を[illegible]を、極端に忌み罪惡を迄感ずる私として自己の生活が搾取の上に、築かれたものであると云ふことは堪え難い苦痛であり、許すべからざる虚僞なのではあるまいか。この矛盾を感じ虚僞を知つた現在の私の生活は、全く苦悶の生活である。

それは一方に於ては、希望されるところの正義への觀念に反對的な、現在の經濟的寄生虫的生活に於ける自己の否定、そしてどこまでも女を奴隷たり、人形たるべく强要する封建的保守主義思想に對する自由のための反抗、他方にはこの矛盾、虚僞、苦悶を解決すべき最も正しい實踐的方法は、如何の問題にぶつかるが故の苦悶である。

然し私は只苦しんでゐる丈ではいけない。思惟することのみであつてはならない。この苦しみと勇敢に戰ひ、征服し、之に打ち勝たねばならないのだ。さうだ、私はどこ迄もこの矛盾、苦悶と戰つて行く。——

今村茂氏



（新年早々から農村のプロらしく。ボロの大整理をしてゐたら奥女史からの御便り取る手おそしと開いたら。我が身邊雜記を書いて呉れとの事、一寸躊躇した。何を書く事が有るだろう。

信州の茶呑と云へば實に有名です。その信州の私、一寸赤面の至り、然し養蠶期は半商半農父と妹と三人きり、で非常な長時間の勞働で一切は疲れ切つて失ひます。でその息抜きに冬は茶で休むのかも知れない。

が、さて現在はそんな蛙が穴の中で冬ごもりする樣なわけには行かないから、あわてふためいて目玉の運動を初めたが、やろうと思ふ仕事がない（有つても、ソロバン彈けば足らぬ、では、ないも同然）

實に、私共人の田地で半商半農は首筋のこわくなる事はクライマツクスだ。

○

昨日書きかけたら、年始のお客さんで駄目にせられ、一泊御逗留、翌十一時ころ歸る。片付け、洗濯、明日の餅付きの仕度等々で暮れて仕舞ふ。

ホツト一と休みと思つて、こたつ柱にしがみ付いた時電氣はパツト付いた。

昨日の身邊雜記のつゞきと思つて、ペンを取つたら店にお客さん、隨分ぐずぐずした買ひ方で一寸はがゆい。うろうろしてゐる内に夕食。喰物で茶づけ、お得意のあわて屋で、かつこみ寒さが全身にみなぎる、こたづにとび込む。又ペンを手にする。店にお客さん。

タバコ買ひ、七錢のバツト一つ、有がたう。

何が有がたいのか、こんな不平を思ふ商人では——が、それも道理商ひは自分の好みではない、父の貧乏遺産になるのだ。

とりとめもない半商半農、嫁になる事はおびたゞしい。何か書きたい氣が一杯になつた時、通帳ぶら下げて店にお客さんが來る、その内には茶呑が來る、駄べん、生活のグチや男はいばり過ぎる、等々に熱を上げて一時間位して歸る。

ホツトしてさあと思ふ時、縫かけの仕事は待兼ねてゐる。でも一寸書いてからと思つてゐると、丁度そんな時父がつくねんと見てゐる。

一寸まづい（父は多少理解も有るが因襲に大のメートル上げ）

冬の事とて、時はスキーですぎて仕舞ふ。眠氣はようしやなく捕虜にして仕舞ふ。結局馬鹿げた事に切角浮んだ事も忘れて仕舞ふ。

明け暮れ馬鹿げた事に過ぎて仕舞ふ、一般農村婦人を思ふ時、つくづく寂寞を感んぜずにはゐられない。

若い人に逢ふたび、どうにかし樣ではないかと熱を上げるが、農村婦人が目覺めて來るには非常な努力が必要だ、婦人ばかりではない、男が本當にさめてこなくては。

縫ふ手を止めては時々、そんな事に一人考へをおしまぬ。

長沼朝氏



農村婦人としての私の生活なんて實に成つてゐない。此の間父と或事件で衝突して以來私の身邊には激しい反動の嵐がにはかに物凄い勢で吹き徐くる。その嵐の眞最中に奥氏から、農村婦人としての生活記錄を書けと云ふ手紙。先便でしばらく雜誌「婦人運動」さへも送付を停止して、欲しいと云つてやつたのに、これでは全るで何んの事だか、私はポカンとして仕まつた。これを書く私も私なら、書けと云ふ奥氏も奥氏である。もしこれが見付からうものなら、私は早速座敷牢である事を覺悟せねばならない。

所で私の農村婦人としての生活だが、前に書いた通り實に成つてない。朝から晩まで裁縫の仕通しである。母が嚴重に張番をしてゐる。で毎日裁縫してゐるので、上手だかと云ふと一向さうでもない。時折左と右の袖丈を間違つて母を驚かせる。そして母の曰くである。

まだ〱〱と、その通り、五十を可成過ごした母の境地まで達するには、實に、まだ〱〱〱である。

農村は殊に娘の行動がウルサイ。運動上の友人など訪ねて來樣もなら、とんでもない事になつて仕舞ふ。良くて門前拂ひ。惡くて一切お斷り。同志は良く私の生活を多忙な中から、罵つたり嘲笑したり仕て寄こす。くやしくたつて、事實生活が成つてないんだから、怒り返してやるわけにも行かない。

愛する姉妹が寒風の吹きしきる中に、惡戰苦鬪を續ける時、冷たいテーブルの上に自己の食を働らく時、私は全るでトンチンカンの話に氣を腐らしてゐる。農村婦人である私達が、苦しくとも輝ける解放戰に身を投ずるまでには、實に大なる飛躍と根限りの力と、呪ふべき親不幸とを必要とし、不良娘の名を頂戴せねばならない。特に私の家は崩壞しかけた農村の中產家なるが故に手の付けられない事ははなはだ、以ておびたゞしいのである。

こんな事を書く事は許されない贅澤な、煩悶であるかも知れが、純プロレタリアの娘として生れて來た方が、どんなに良かつたか? ウルサくて生ぬるいのには吐氣がする。それよりも寒夜電燈の下にグルッと圓く坐つて、ボロつぎをする時燃える樣な正義感を持つて、地主への憤激を彼女達に語り、呪ふべき組織のからくりを彼女達の側近く、耳側で話すがいゝ……彼女達はきまつて眞劍に耳をそば立てる。そして彼女達は必ず立ち上る。農村の婦人と可成違つた點を持つと云ふ、それは一度立てば最早最後まで鬪ひ續ける實に、根强い克明さである。來るべき革命時の農村婦人の役割こそ如何なる迫害にも毅として應戰するその輝ける克明さであらう。

農村婦人！ 農村の姉妹の立つ日こそ、全社會が光明に向つて、前進するよろこびの日である。見よ萬事は偉大なる感激を持つて今や社會革命に近づきつゝある。それへの尊き輝ける犧牲として愛する吾等の同志は、今呪ふべき罪名の下に牢獄に坐し又は、巨大なる資本とエンチユンの前に間斷なく鬪ひ續けてゐる。

尊き而して輝ける解放戰の下に！

農村に住む私は今、それへの躍進に全身は戰慄き心は家庭からの、苦しい誤解に無限の忍從を强める。

渡井君子氏

一月十一日

S様からのお便りに「農婦一日」の原稿をとの御要求ですから左の私達の生活の斷片を綴り不足ながらも御要求を充たさせて頂きます。

毎朝五時半頃起床、徹底的の調理法も知らず無智な、母達に、傳へられ、しまひに粗食を整へます。乳兒抱く母達は、背負いてやらねばなりません。それと室内の掃除は、私達の朝食前の日課として充たされて居ます。只今は農閑期です故、さしたる多忙さではございません。この閑期こそ、私達の休息期間、とは申しますものの、一年の大方を野良で働く私達には、長い間の多忙時に、すり切れた野良着の手入れや其他の雜事が先廻りをして居ます。

それのみならず、貧と云ふ恐しさは、何時も私達を脅かして居ます。生産者でありながら、土地を持たぬ貧農民は、一年の食量さへ充たされず、それを補ふ爲め、男子は外に出て、婦人は殘された、子供と共に、出來得る丈の勞働を續けねばなりません。私達の村は水田のみです故一毛作で別に副産物とてありません。婦人は遠き封建時代より傳へられた、繩をなふ位なものです。朝冷たい中から、夜は十時半頃まで、それとても、生産過剰と經濟不況の爲め、藁代位に價するのみです。一ヶ月遅れの、お正月を迎へんとしつゝある農村の歳末に、子を多く抱く母達は、何時も〳〵、繩なふに餘念ありません。小ちやい兄ちやん、姉ちやんになつた幼子冷たさに甘へれば母親に叱られます。止むを得ず日向を探し求めて、太陽の昇天を待ち遠しく期待する可憐な姿、それは私達を最も悲哀に感じさせる現象です。

ボロ着物に澤山くるまれて、すや〳〵眠る乳兒何んに驚いたのか、悲鳴をあげる乳兒、少し位のなき聲では、抱き上げる氣配もない母親、勿論聞えぬ意味でもございますまい。冷たいぬれた藁持つ母親の手、ヒゞとアカギレ……乳兒は、滿身の力をこめて泣く。小ちやい姉ちやんは、出駄良目の歌を口吟む、さうした煩悶の中に生きる貧しき母達は、果して何んの爲めに生きてゐるのでございませうか?敎育も與へられない私達農民婦人は、社會的の希望とてなく否さうした廣い問題には、あまりに盲目になつて了ひました、

永い間强ひられた忍從生活の中に、只吾子を愛せんが爲めに、「吾子を愛する」……働くといふ事より外に、與へられぬ私達農民の母達は子を愛する「母性愛」忍從生活の中にも、非常な强みを支持して居られます。私達の母達といふものは、無智なだけに、肉體的にはずゐぶんと無理な勞働を續けて居ます。否さうあらねば生活出來得ないのです。押迫る一ヶ月遅れの年末に、貧しさに生きる悲哀をジッと耐へて、愛する吾子に一足の足袋を新調して、笑顔を見度いと望む母親が、冷たい夜の寂寥を破つてガチヤン〳〵繩をなふ機械の音のみ聞えます。眠れる子供達は、今どんな夢を結んで居るのでせうか?

私達の如き娘時代は、この僅かな農閑期に直接必要な縫物を覺える爲めに、沒頭されて了ひます。やはりプロ農女です故。近代的な手藝編物等は覺え度いと希望しても、私達の現實とはあまりかけ離れがあります。私達の一日は、これとて目覺ましい事なく、文化文政の社會の斷面の下層に、埋沒されたルッポの中で虐げ……無智……恥辱……悲哀を耐へ偲んで、農閑期の不活潑な農民婦人の一日を、生涯の分子として過されて了ふのです。



山里樫氏

米のなる木も未だ知らぬ繁華な都の生活に、綺羅を粧ひ日に月になす事もなく過すもあれば日夜の荒野の仕事に寢食を忘るるもあり、實に人間の境遇は恐ろしくもあり、又貴いものでありませう。

原始生活其のもゝの様な農村、都の人の思ひも及ばざる辛苦、文明の風に浴し得ない農村婦人――否婦人と云はず、農村に於けるものゝすべての生活は、一方に辛苦もあれば又之に伴ふ個有の情緒もある。

經濟の發達の道程から云つても、原始生活を充分に脱して居ない農村には、個立的な所がある。それ故に又人々の仕事も煩はしい、都の人が花見遊山に浮かれ歩く頃、農村では春蠶（春季蠶）が生える。其の世話掛は大抵婦人が當る蠶と云へば生きたものを扱ふのであるから、人間の子供と同様に、其の世話をするに至つては夜の眼もろく／＼に眠られない。温度の調節、床換、授桑、整理之ばかりではない、子供の世話臺所の始末一切が婦人の肩の上にある。夜など、子供の寢た間をぬけ出しては蠶に桑を與へる。次第に春蠶も太りて、四眠上簇の頃となれば本當に忙しい。勿論此の頃には家中で其の任に當るけれ共。小さい子供が大ぜいある時には實際困る程忙しい。其の内にも朝は子供が學校へ行く仕度を整へてやる。晩には乳呑兒は泣き出す。鷄を寢かす等、朝晩の忙しさは一通りではない。

春蠶が過ぎれば田植、それが過ぎれば又今度は夏蠶が生える。夏蠶は一夏に二回も三回も養ふ故に肩の休まる暇はない。其の間には田の草取もする、畑の耕作にも行く、田植の頃に蒔いた小豆やてんこ（小豆に似た豆）が土用頃になればあからむ。之を摘んで日に乾して、晝休の日蔭でたゝいてもんで小豆の實にする。春蠶にば桑は枝のまゝ、與へる夏蠶には桑を摘んで與へる。炎天に照されて桑をつむのは都會の人が十四や二十四中わけに面白半分、或は何かの研究のためかも知れないが蠶を養ふのとは異る。

夏も終り秋になる四方の山々紅葉になり、川の堤の紅葉が梢から紅になり、稻の穂の下り初める頃都會の人が田舍へ茸狩に來る頃、あらはになつた桑畑の桑を縛りながら、長閑な小春日和に何を考るともなく、野良仕事にいそしむのはよいであらう。その時季が終ると今度は忙しい取り入れ、それこそ朝は朝星夜は夜星、日は次第に短くなる、手織衣服の裾も短く、臺所の仕事子供の世話鷄の世話、掃き掃除等、これらの事はおばあさんでも家に居て、手傳つてくれれば主婦は大いに助かる。

夜は子供を寢かし附けて置いてから。籾摺りをする。霜がおき初め蜜柑の色づく頃月の冴えた夜など、あちこちで籾摺の音の聞えるのも田舍でなくては味えない情緒であらう。取り入れにつゞいで麥蒔き、それがすむと一年の仕事の大抵は片づいて少し暇になる。暇と云つて暇はないけれ共今までよりも樂になる、此の頃は婦人は夜なべ、夜なべとしては冬の着物の仕度つくろい物洗ひ張りすべて之こそ、婦人の役目である。冬の日は短い、日の中は日なたぼつこをしながら、畑の大根をひいて來て、洗つて大根切干を作つたり、又さつま芋の切干を切つたり、澤庵大根をつけたりする。

此の時季は一年中の大整理の時で、家中の人の着物の整理をして、洗ひ張りつぎ、足袋を作る。田舍の人は買つた足袋は弱いから、家で丈夫な布で作る。機を織る。之も買つた太物は藍が本藍でないから、色がはげ易い、又弱いといふので紡績を買つて本藍で染めて、機を織るそれで普段着を拵へたり、ふとんにしたりする。今の世の普通の若い人ははたどといふ物も、糸車も知らないであらうが、田舍へ行くと今猶使つて居る。又みそを作る。みそを作る時は何となく冬がきた様な氣がする。大きな大釜で大豆を煮てつぶし、球にして細繩に、通して天井に釣しておく。乾いて堅くなつて糀花のついた時つぶしてみそを仕込む。大抵其の様な平凡な仕事で短い日は過ぎてしまふ。田舍には奉公人と

いふのは特別な家を除く、外は使つては居ない皆婦人が此の役目をするのであるから、いそがしいといふ事は一代のつきものである。質朴で純情其のものゝ半原始的な生活、何の飾りもなく、つくろいもなく土俗に合した毎日の生活、都會の繁華を知らず、おごりを知らず、文明も開化もどこを風が吹くやらといふ調子で、毎日忙しい〱で暮す、純な田舎の生活に別に異つた望もなくあまんじて生活して死んで行く。上を見れば限りがない下を見ても又限りがない。各々其の分に安んじて、自分の職務に勢を出すのが第一と考へて居るのであらう。日夜營々として家門苦楽を共にして、別に野心も抱かず望ももたず、過して行く農村婦人の生活！ 實に救はれないと云へば救はれないが、あまんじて分に安んじて滿足して居る所が、何よりの幸福かも知れない。世の一隅にのみ上つて大海のある事を知らず滿足して過して居る所に、人生の快楽を感ずるのであらう。

昭和四年一、一、七

田中冬氏

下の子供がこの頃風を引きましたもので、夜もおち〱眠れない。農村としては最もヒマな農閑期ゆゑ、こんな時分の日記が御参考になりますかしら。みせたいのは五月頃、夏、とり入れの頃。猫の手でも熊手でも借りたいやうな農繁期には、女だか男だか――いやさ、人間だか動物だかわからぬ格好をして、みんなが働くのです。

敎へていたゞいた私の丸薬作りもやつと、上手になつたと自慢に思ふてゐたのでしたが、やつぱり忙しいとおいそれとまにあはぬ。やつぱり東京から、送つて頂くことにしたいと思ひますから、又、どうぞお世話をたのみます。外の村のことは知りませぬが、私の村で、私が、産兒制限のことを、話してきかせる樣になつてから、初め初め半疑でゐた者までが、まるで私を人助けの神樣かなんどの樣に、みんなが頼りにしていろ〱な相談に來てくれます。私はほんとにいゝ福音を授かつたものだと、自分自身でも喜んでゐます。私のやうに、産婆の心得のある全ての人が、農村に於ては、多産で困つてゐる人、からだの弱い人、びんぼうな人などに、暫く息抜きして休む樣に方法を敎へてほしいものだと、ほんとにさう思ひます。

こちらは舊正月をしてゐますから、半年の間にためた支拂ひのあと片づけを、しなければなりません。高い〱と思ふものですから、毎年二割か三割を殘して拂ひます。――それだけの損失はちやんと、商人の方では勘定に入れて値段をつけてゐるのかもしれませんね。みす〱高いと思ひつゝ、現金が出來ないものだから、半年も節季の店で買ふ樣に、ひとりでになつてしまひます。半年の間に稼ぎためた現金の九分五厘までが、支拂ひにとられてまるで右から左へのあわたゞしい移動！ 札なんて、ほんのちらと横目でみるばかりで、すぐ人手に渡さればならぬ阿呆らしさ。

又、來年からの小使錢にもこと缺くものですから、再び懸け賣りの商人へ！ 働いても働いても、手から口への生産しか出來ない農村の人は、全く生きて生き甲斐がありませんね。

それに村にゐては新聞をよまず、雜誌をよまず――「婦人運動」一册が百萬の友だちです。――話し合ふ友だちとては一人もなし。うす暗い臺所で冷たい水仕事を、いつまでもつゞけて一生がすんでしまふ。子供たちが汚ない着物を着てゐると笑ひなさるなよ。洗濯をするひまさへないのです。朝も朝とて忙しいし、ひるは勿論忙しい。殊に私の樣に、子供が四人もあつて

未だ姑の介抱をしなければならぬ身分では、そのために、一層近所の思惑を顧慮しなければならず、うそにでも、足をさすりませうか、と云はねばならぬのですからね。まあ、東京で、生活不安でピク／＼暮らすより未だ幾分か、これでいゝといふものでせうか。

戸梶花子氏



南の國にも寒風吹荒ぶ厳冬の頃となつた。朝な夕な、ひつきりなしに流れ行く吹雪まじりの雲、霜柱立つ川邊眞白き橋の上……淋しい冬木立の彼方に、牛追ふ童の寒氣にもなく、農園に急ぎ行くは、田舎に相應しい健男子の活動である。鍬を肩に鎌を右手に田圃道を行き交ふ、村の農夫たちの活氣に滿ちた樣は、都人に告げるには餘りにつりあひの悪い話である。とり分けブルジョア階級の婦人に於てをやである。

然しシャンデリヤまばゆきソフアの上で、小說を見て一日を送る殿上人の生活を考へれば、又馬鹿々々しくもある。彼等ブル階級は、祖先より受讓らる財力によりて、自分一代は安樂に不況知らすで送れるのである。然し是等少數の資本家を除く凡ては、餘りにも淺間しい勞働者の群である。日々に濃厚になつて行く不況の風は都鄙至る所迄しみ込んで、生活難に伴ふ就職難の聲の彼處此處に八釜しく、日給僅かに七八拾錢の勞働者も少くはないではないか。

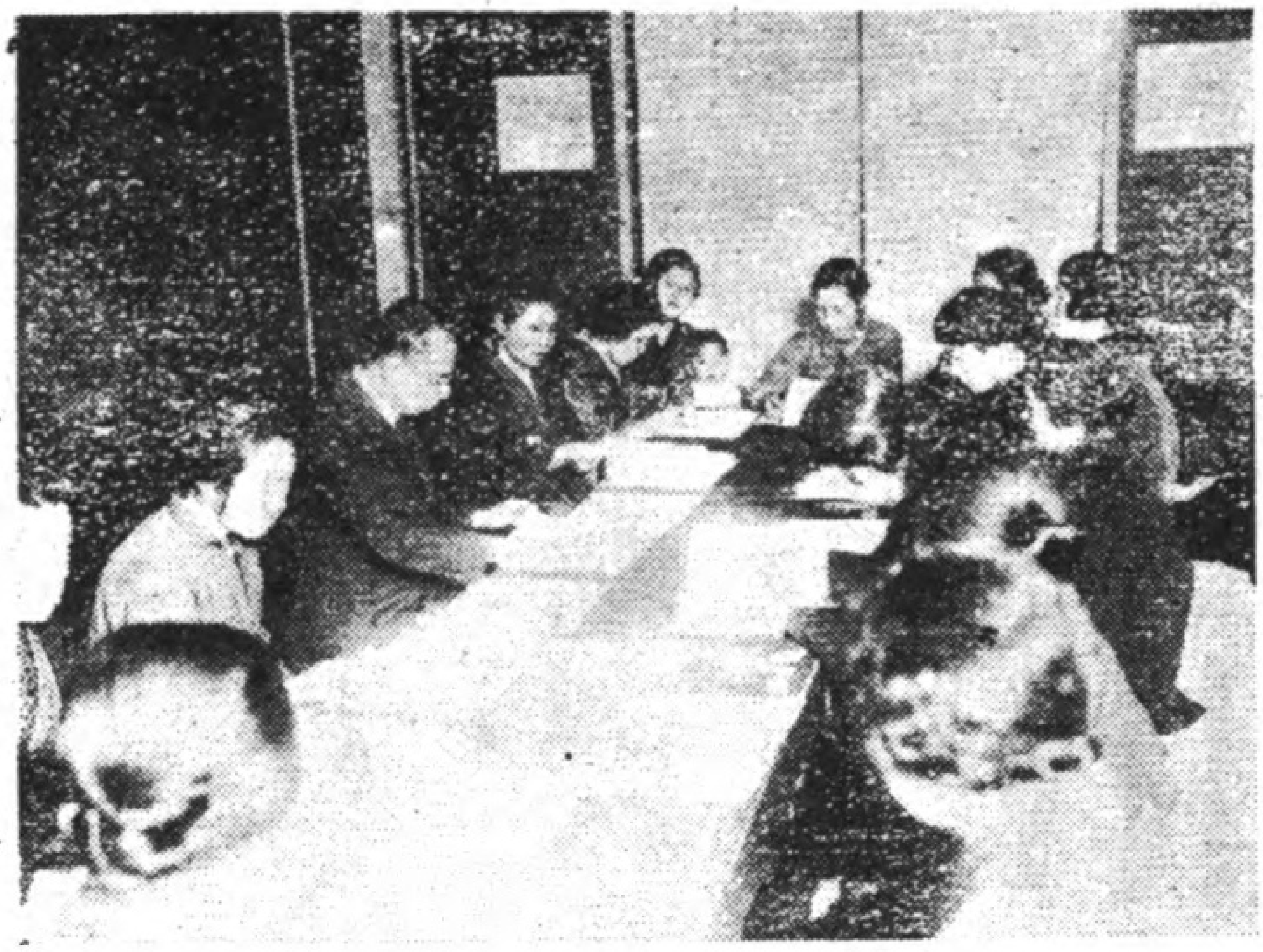
「我等は、これでも資本家の玩具で通さなければならぬのか」農村救濟とは名のみで、我々農村は、何等の恩典も受くる事が出來ないのみならず農民自身の、田園生活を厭ひて町へ／＼と集ひ行く傾向である。その傾向と原因は早い昔からあつたといふ。なぜなら都會文明が社會文明の中心であり、都會美が社會美の中心である時彼等がそこを目指すのは、或は必然であるかも知れない。然し都會に出でゝ彼等の理想の就職と生活の安定とは決して難からん。實に悲しむべき現象である。彼等のわざは只淺墓な外來思想にかぶれた醉興人の疑ひであつて、女子解放の彼岸への道程を示すものでもあるまい。

惰眠を貪つてゐる農民よ日本の婦人よ、今や覺性の鐘が亂打されてゐるではないか。先覺者たる婦人の手によりて。救ひの神は慈愛の手を垂れてゐるではないか。ひつきりなしの農村婦人の仕事の上に於ても、精神上の苦勞の上に於ても、我々婦人は團結せなければならない。協力一致をして、互ひに助け合はなければならないのである。消費生産の意義を悟つて、是非社會制度を改良しなければならぬ。くだ／＼しき臺所仕事、その他あらゆる點に於て、山深く住ふ婦人よ舊式な女大學主義にかぶれる事勿れ。今や生活難は、老若男女を問はず使ひ苦しめるではないか。舊式な良妻賢母主義は封建時代の遺物である。我々婦人は育兒の上に於て、又生活上に於いて、新しく正しく明るい、合理的な道をふむ樣につとめるのでなくては、昭和新政の本旨にもかなはない。

外形のみをまねるモダンガールよ、早く覺めて汗する勞働の尊さに歸れ、行きつまれる農村と婦人の地盤を固めようではないか。質朴なる青年男女となりて平和の中に進んで、堅實な家庭の人とならう。時代は遷り流れて行く。恐ろしい力で、輪轉機よりも早い廻轉をつゞけてゐる。荒波にもまれた磯の眞砂こそ、始めて圓くて美しい稱讚を受くるではないか。幾多の難關を突踏して進んで行かう。その曉にはきつと農村も救はるであらう。婦人問題もその時こそ。

婦人消費組合協會一月例會

一月二十五日午後一時より、神田教育會館に於て開催。當面の問題である東京市政に就て前助役前田多門氏の講演を聞き、なほ純家庭婦人の立場から市會議員選擧對策につき協議し、下記の如き聲明書を發表した。



東京市會の改選に對する聲明書

醜惡に醜惡を重ねた東京市會は、遂々解散されて、普選第一回の選擧がいよ／＼三月三日に行はれることになりました。けれども名は普選と云ひながら實はかたわの普選であつて、東京市民の半分を占むる私たち婦人には、選擧權も被選擧權も與へられてゐないのであります。然しこの重大なる市會改選にあたつて、たとへ私たち婦人の權利は未だ許されてゐなくとも、斷じて手を拱いて、傍觀すべきではないと確信します。

わが婦人消費組合協會はこの際、日頃主婦としてかず／＼抱いてゐる要求を、勇敢に闘ふ候補者に對して、全力を擧げて應援する事を聲明します。重要な要求としては

一、家賃制限法を設けること
二、電燈、水道、瓦斯料金並に電車賃の値下
三、市立の病院、産院、結核療養所等の増設
四、兒童及び母性保護のための特別施設
（イ）ミルクプラントの設置
（ロ）兒童健康相談所及び托兒所の増設、姙産婦保護施設
（ハ）兒童遊園地の増設
（ニ）學校衛生設備の完備
五、市設質屋、浴場、食堂、火葬場、葬祭場の増設
六、婦人職業紹介所の擴張
七、方面委員に女を採用すること
八、實業補習教育並に夜學校の擴充
九、成人教育の徹底

以上の諸要求を達成するために、私たちのとるべき方法は先づ第一に、無産政黨を援助するにあると考へます。なぜならば無産政黨は前述のやうな日常當面の要求を獲得するために、戰ふ政黨であり、また私たちの要求實現の社會を理想とする政黨であるからであります。なほ假に中立の候補者であるとしても、最も眞面目にまた最も勇敢に私たちの要求のために、戰ひ抜くことを宣明した候補者なら、等しく全力を盡くして應援するものであります。

右聲明します。

昭和四年一月二十五日

婦人消費組合協會



アメリカに於ける

家庭改善運動

片岡重助

アメリカが家庭經濟に力を入れ出したのは僅かに一九〇八――一九一七年（廿世紀の初め）位の事で未だ、さう古くない。

然し、從來の家庭經濟といふのは、有閑階級、都市生活の模倣をすることに外ならなかつた。全ての生活を紳士らしく令婦人らしく、令孃らしく上品に文化的にするといふ事が、上下を通じての思想であつた。（イギリスに於てもさうであつた）殊に、新移民であつたアメリカではそれがひどかつた。

ところがやがて、家事はどうしても其根元であるところの生産と結びつかなくては駄目だといふ事に氣がついた。これはアメリカが、農業生産物が多い國であ

婦人界近事

活氣づいた全國廢娼運動

廓淸會と矯風會と救世軍とで、廢娼聯盟を組織してから、縣別に手分けをして全國の公娼を廢止するやうに、猛烈な潜行運動をつゞけてゐましたが、大變な力になつて、すでに埼玉、福島、福井、秋田の四縣では公娼廢止の建議案が縣會を通過しました。

長い間たゝかつて來た廢娼運動も、いよいよ目的達成の日が近づいたわけです。なほ同會では、貸座敷業を營業としてゐる全國の縣會議員に對して、辭職勸告の猛運動を初めました。

廢娼の善後策として授産事業を盛大にせよ

全國婦人同盟では、いよ〳〵全國廢娼の日が近づいたにあたつて、娼妓らが廢業ののち正業に就いて明るい生活に入ることが、出來るやうに、適當な職業の道を與へるため授産事業の準備を急げといふ運動を初めました。

るからでもある。從つて、單なる消費だけを考へることが出來ず、生産の方面消費と生産の筋道とを結びつけ、家事經濟を農業と共に考へなければならぬ、といふ事に氣がついて來たのである。そのためにコロンビア大學の如き有名なところの家事科の權威が失墜して、農業と結びついた農科大學の家事科が行はれるやうになつた。(コロンビア流の家事科も、今日では餘程さういふ方面に變つて來た)

日本では、英國流も佛國流もあり、アメリカ流もあるが、アメリカ流のそれは多くコロンビア流の、有閑階級流に仕組まれた家事科が旺盛で、未だ、新しい流れは、入つてゐないやうに思ふ。從つてわが國の學校の家事科は、古來の日本的な風雅な諸流派と、コロンビア流のそれとが合體していよ〱典雅、上品な文化生活的な家事が一般を風靡してゐるのである。

ある女學生の話によると今日の家事科では、月收百圓、百五十圓の生活者の家庭の家計を樹てることを勉強してゐるといふ事を聞いた。

では、今日百圓乃百五十百圓の收入は

いかにして得るだらうか、

といふ質問をしたら、行きつまつてしまつたのであるが、即ち、生産を離れて消費方面だけを、問題にしてゐるからである。即ち、ほんとに消費を考へるためには生産にもさかのぼらなければならないのである。

實際のアメリカで如何に行つてゐるかといふに、ある地方にトマトがあるとすれば、農學部がそれを採つて、いろ〱の生産加工方法を研究してみる、(貯藏法罐詰法、料理法)そして、更にさかのぼつて、栽培法から、輸出法、宣傳法に至

全國の婦人團體から婦選獲得共同委員會に加入せよ

議會が初まると、猛運動を初める婦選獲得共同委員會では、これまで、東京の婦人團體—但、參政權獲得を目的としてゐるもの——だけで組織したゐたのを、今度改正して、參政權のために協力する全國の、有力な婦人團體に全部加はるやうにと、案内を出しました。

全關西聯合婦人會でも婦選運動

全關西聯合婦人會では、一月一ぱいを婦選の請願デーとして、婦人參政權要求の請願書に廣く一般から、署名してもらふ運動をします。二月に、代表者がこれを持つて上京して議會につめかけるのです。

産兒制限法を公けに認めさせやうとする案

無産黨の代議士及び、既成政黨の代議士の中の新人らが協議の末、次のやうな内容の産兒制限の法律案を、今度の議會で提出することになりました。

一、産制運動を法律で認めること、

二、姙娠三ケ月以内ならば墮胎を罰しないこと、

るまで研究をすゝめるので、消費と、生産と、きり離して考へることが出來ない所までやつてゐる。

從來、ジヤガ芋でも、穀物でも、金子さへ出せば、引きかへて來られるものといふ考への上に立つてそれの使ひ方を教へるのであつた。然しこれは消費者としてまことに淺はかな考へ方である。この考へ方を改めるために、生産の筋道まで知らせるやうに教育運動を、クラブ・ウォークでやり出した。

即ち十二歳——二十歳位の女子を六人から二十人で一つのクラブを作らせて、一〇の中心計畫をもつ。例へば罐詰の作り方といふ風な。そしてその畫計を中心にして一年位つゞけて會合をやるのである。展覽會や、デモンストレーションや協議會やを、計畫的に行ふ、そして一回毎に案を進めてゆく。

この團體は、頭の考へ方を明瞭にし、心を忠順にし、手は社會のために出來るだけ奉仕出來るやうに訓練し、健康を增進して、生活を豐富にしてゆく、といふ主義の團體で自己訓練の團體である。その指導者として、その地方の婦人が地方指導者になる。郡には又郡の指導者、州には州指導者が(婦人)あり、中央には中央の指導者がゐて極めてデモクラテックに、自治的にやつてゐる。成績をあげるために先づ個人を訓練し、そのクラブを訓練してゆくといふ風に、下から育てゝゆくのである。日本では十把一からげのきらひがありはしないか。

中心計畫には、罐詰、帽子、料理、育兒、家庭、簿記、養鷄、牛乳の加工品を作ること、蔬菜園藝その他四十幾通りある。

一體日本の會合は、長すぎると思ふ。

三、墮胎罪を體刑にせず罰金刑にすることと

四、虛弱な母體を保護するための法定墮胎範圍をもつと擴めること

日本女子商業學校の高商設立

嘉悅孝子女史の同校は、明治三十六年の創立で、すでに三千人の卒業生を出してゐる程ですが、今度女子の高等商業學校に昇格させる準備に入りました。

婦選同盟の東京市會選擧についての對策

一、市會の空氣を一新するため、前市會議員を選ばないこと

二、市會淨化のため、贈收賄瀆職罪で刑にふれたものは勿論、さういふ嫌疑をうけたものを選ばないこと

三、貸座敷業者と三業者(藝者屋、待合、料理屋)の者を絕對に選ばないこと

そして、適當と認める候補者の推薦應援をし、一般候補者の閱歷や政見を有權者に敎示し、立會演說もさせる。又、未だ投票權をもたない婦人に對して、公民教育を行ふ筈。

夫の蓄妾を理由に離婚訴訟

京都市の某菓子屋の妻が、その夫が妾を圍つてゐるので、これを理由として離婚訴訟を起し敗訴した。

彼國では、一時間半、二時間位でさつさとすます。そして、その二時間なり、一時間半なりを五分乃至十分おきに、豫定を立てゝきめて、その通りに會を進めてゆくのである。一つのクラブが、目的を終へると（免狀が下りる）解體して、更に、外の新しいクラブを作つて初めてゆくといふ事になつてゐて、幾つかを經てゆく內に女の資格が具はるとみられてゐる。

デモストレーションは、クラブで習つたことを、實演して、人にみせる事をやるが、ホームデモンストレーションで人にみせた上等級もきめて貰ふのである。

日本であつたならば、さういふ場合に成べく珍しいものを並べるにちがひないのであるが、彼國では、例へば料理ならばスープ、トースト、パイ、サラダといつた風な、極めてありふれた日本に於ける味噌汁、お煮しめ、二杯酢程度のものをする。ほんの少しばかり珍しい御馳走を並べてあるにすぎないのである。彼らに云はせると、通常一般の人がたべるもので、けいこを積んでゆくべきである、料理方法が多少變でも、何とかごまかしてたべてゆかれる樣な肉や玉子類の料理は特別にかういふクラブでけいこしなくてもいゝといふのである。これは日本の各講習會に於ても考へて貰たい點である。

米國婦人の政治運動

市川房枝

昨年十一月六日に行はれた米國の大統領選擧戰では、婦人がフーバーを當選さ

「妾をおくことは現在のわが國では、一般の風習であるから、さう惡德であるとは云ひがたい故、配偶者に重大な侮辱を與へた場合には入らない」

といふのださうである。然し彼女はすぐ控訴しました。

内相は婦人の公民權に反對である

政友會で、婦人參政權の前提としてまづ、婦人の公民權だけ實現させようと、すでに地方制度改正案に含めて法律案を、政府側より出すことになつてゐたのに、望月內相は新聞紙に反對、時機尚早の意見を發表しました。

婦人界は各方面から、婦人に公民權を與へることの決して、時機尚早でないことについて輿論が高く揚つてゐます。

明治大學が女子法學生のために門戸を開放する

明治大學では、婦人辯護士がいよ／＼實現されさうな機運になつて來たので、女子の法學部を設けて、この四月から入學させるため新校舍新築にかゝつた。外の大學のやうに婦人だけを、傍聽生とか選科生とかいふて差別待遇をするのでなく、本科生として、男子と同等の資格で入れるのです。

せたといはれる程、婦人の政治運動が盛んに行はれたし婦人の投票者も極めて多かつた。

　政治運動には政黨の黨人として、乃至は黨人でなくとも外部から或政黨なり或候補者なりを應援するのと、全然中立の立場から棄權防止、政治教育運動といつた間接の方法によるのと二通りある。日本の選擧法の文句でいへば選擧運動と政治運動との二種がある。

　米國の此度の選擧ではこの兩方とも行はれたが(米國婦人は、參政權も結社權ももつてゐるから)多くの婦人團體は主として後者の方面で活動した。

　こゝでは後者の方の大體を紹介してみよう。此方なら選擧權がなくても出來るし、近く行はれる東京市會議員の改選に對する婦人の運動方法として多少の參考になるかも知れないから。

　政治教育運動を行つた婦人團體の中で最も熱心に中心となつて活動したのは、婦人有權者聯盟といふのであつた。此の團體は世界に於ける婦人參政權運動で有名なキヤツト夫人が會長をしてゐた米國婦人參政權協會の後身で、一九二〇年に婦選を獲得すると同時に組織しなほされたものである。會の目的としては婦人有權者の教育、婦人及子供並に社會の福祉を增進するための法律の制定を促進する事等を揭げて活躍してゐるが、然し政治的には嚴正中立の立場をとつてゐる。

　從つて、平常の事業としては婦人のための政治教育、政治問題の調査研究、パンフレツトの出版、議會への運動等を行つてゐるが、此度の選擧に際しては、特に、

一、折角獲得した選擧權を棄權しないやうに

新刊紹介

南歐の空

吉江喬松著

　本書は近代の初頭に於ける文藝藝術の源泉なり背景である南歐の空に、その輝かしい紫紺の空の下をたどつた回想記、その空の美の落つるをとめて歩いた旅人の思ひ出である。その他文藝評論の章あり、農民文藝の章あり、自然美の章あり、殊に「美身群像」の章は、女性美の文藝の中に現はれた輝きをとめてみようと心がけたものである。

(定價二圓三十錢、東京牛込早稻田大學出版部發行)

婦人運動當面の諸問題

水野正次譯編

　資本の集中、合同、資本家組織の强大化は急速に進展し、勞働者階級に對して優越な戰鬪力をもつて暴力的に産業の合理化を遂行してゐる。この資本主義的合理化の分析研究を解決するは無産階級運動の進展に最大な任務である。この大衆的鬪爭を成功

二、更にその選擧權を有効に行使するために選擧の方法、並に政黨、其時の問題等についての知識を與へると共に、

三、候補者の經歴、政見を調査してその選擇をあやまらしめないやうにし

四、更に選擧の廓清につとめた。

婦人に參政權を與へても棄權するものが多いだらうとは、日本等でも大分心配してゐる人があるが、米國婦人でも第一回及第二回の大統領選擧の時には、棄權者が非常に多かつた。婦人で投票したものは、三割五分乃至は四割位しかなかつたらしい。

所が此度の選擧では男女共非常に多く殊に婦人は第二回の時は約千萬人位しかなかつたのが千五百萬以上も投票した。——然しこれでも婦人有權者總數の六割一分位にしかあたつてゐない。

婦人團體の棄權防止運動があづかつて力あつた事は確だ。

同盟が棄權防止運動のためにとつた方法には色々ある。

第一には棄權者の多い事實並に投票は國民としての義務であることを出版物、ポスター、人形、活動寫眞等にこしらへて、會員は勿論、各婦人團體及一般に宣傳した。

第二には、同聯盟の各支部乃至專門學校内の支部に對し、棄權防止のスローガン、その方法等を懸賞で募集したり、棄權の少なかつた地方の支部を表彰する方法をとつた。

第三としては、選擧に行はれる署名日及選擧の當日には電話や戸別訪問をして狩出しをしたり、交通の便宜の惡い所の婦人、老婦人等を自動車で投票所へ運んだり、電車内各所に「投票に行け」とい

の道に導くは廣汎な婦人大衆の積極的な參加なくしては出來ない。又、資本主義的合理化の最も慘酷な犠牲を强要されてゐる婦人大衆が參加してこそ始めて大衆運動と言ひ得るし、歴史的使命遂行の過程を、勝利を以つて一歩前進することが出來るのである。本書はこの問題について參考資料として便なるものである。

（定價一圓、東京芝區新櫻田町十九解放社發行）

サビエート學生の日記

饒平名智太郎譯

原作者はエヌ・オグニヨフで、原名も獨逸譯も、コスチヤ・リヤブツェフの日記」英譯では「共產主義者の日記」となつてゐる。コロンタイの「赤い戀」が譯出されて以來、それに關聯した婦人問題、殊に、性問題に就いて論議を重ねられたが、この譯書にては、革命によつて解放された新女性のイデオロギーを得たロシヤの女學生が、男學生との交渉、共働に如何なる地位を要求してゐるかを提供してゐる。この小說が曾てノーヴイ・ミール誌上に連載された時に、「社會的に眞劍な、藝術的に優れた、眞

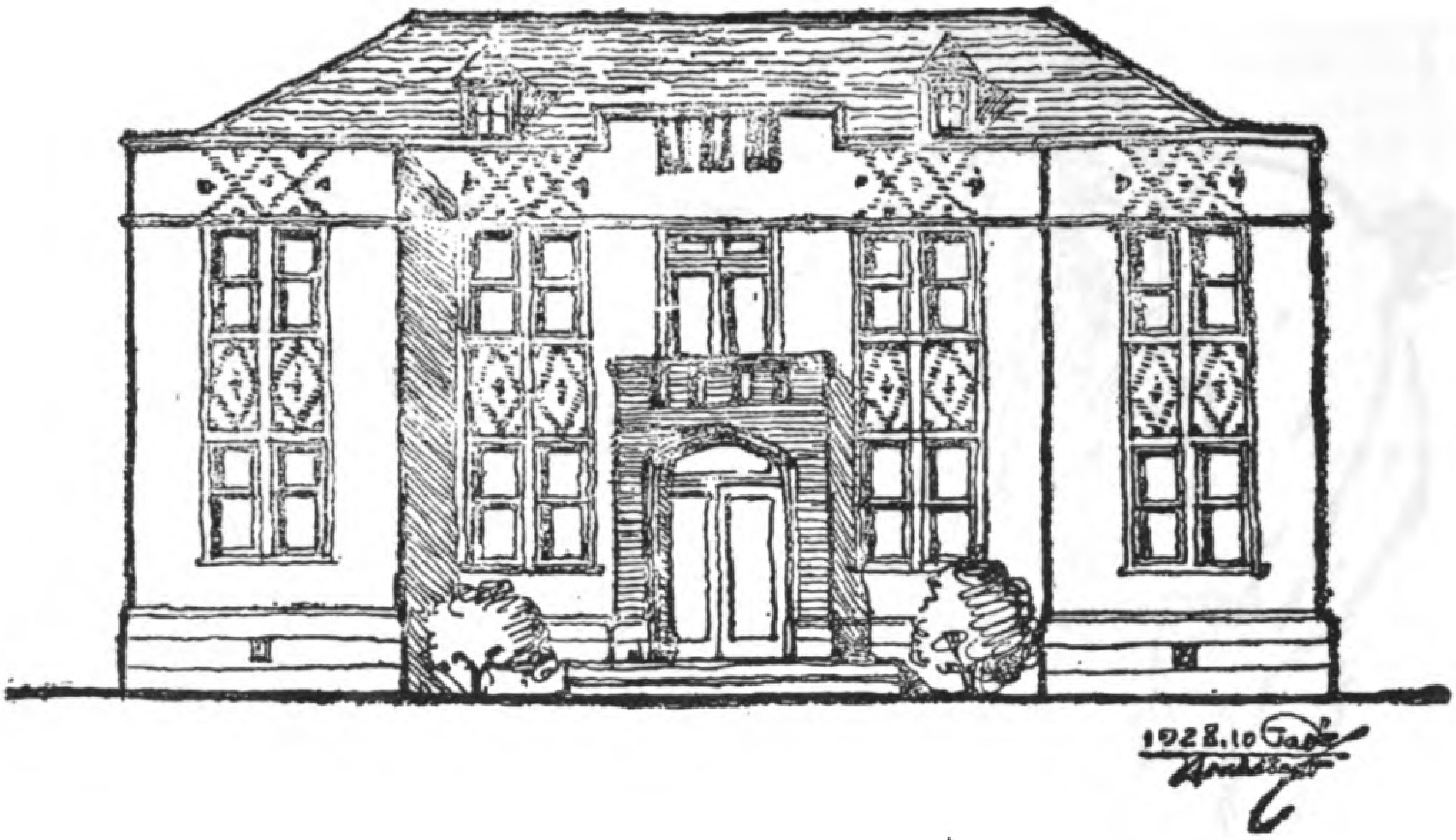
つた意味の、ポスターを張り出したりした。
ラヂオ乃至は活動寫眞館で一寸注意をしたりする方法もとつた。
そこで有權者聯盟は、各候補者の經歷政見を一目瞭然の下に有權者に知らしめるためこれを調査し、印刷して會員及其の他有權者に配布した。
其印刷の中には候補者の個人としての履歷は勿論、政治家としての履歷、聯盟が支持してゐる各種の法律に對して贊成投票をしたか、若しくは反對投票をしたかの事實、將來の態度についての一々の答辯が羅列されてゐる。かう並べられると困る候補者が大分あらうが、然し有權者からいへば非常に便利である。
尙聯盟はかうして印刷する他、直接各黨派の候補者を招いていはゆる立會演說なるものをさせ、出來るだけ有權者に候補者の人格、政見を知らしむることにつとめた。
婦人參政權が與へられる前には、投票場の大部分は酒屋の店頭にあつたといはれる程であるが、これを出來るだけ便利な氣持のいゝ場所にすること、これも聯盟の一つの仕事であつた。尙投票場內では屢々爭ひがあつたり、投票する際に不正が行はれたり、或は投票數の計算の場合に如何はしい事がなくもないので、これを出來るだけ靜肅な公正なものとするため、選擧委員を敎育すること、當日選擧場へ監視人を派遣する事等も聯盟のプログラムに上げられてゐた。
最近選擧委員として婦人が採用される事が多く、場所によつては婦人のみの所もあつた程であるが、これが投票場の神聖にどれだけ役立つてゐるか知れないといはれてゐる。（完）

實の意味に於ける「問題文學の代表的作品「サビエート聯邦の中等、高等學校に於ける種々なる問題――性の問題、試驗の問題、實習の問題、組織の、生活の問題等に觸れてゐる」といふ言葉で藏原惟人氏に紹介されたものである。英國の作家、ベンネットは、サビエート・ロシヤを知ることには最良の本だといふ所に重點をおいて激賞してゐる。
（定價一圓、東京牛込區市ケ谷田町三ノ二十一世界社發行）

無產階級の戰略戰術

青野季吉譯

筆者はスターリンであつて「この論文は自分の創意になるものではなく、同志レーニンの基礎的諸見解の綜合的、系統的概觀と見做さる可きものであることを讀者に注意しようと希望した。」と言ふ如く、これは「レーニズムの諸問題」中の戰略と戰術の章の解說として重要な論述であるから、同章と併せて讀めばプロレタリアートの戰略と戰術に就いて正しい理解が得られる。
（定價三十錢、東京市外杉並町高圓寺六一文藝戰線社發行）



一人のこらずの婦人の協力に依つて「家」を建てたい

いよ〳〵「職業婦人の家」を建設するために募金運動に入りました長い間の願ひであつたこの「家」が大多數の人々の共鳴とお加勢に依つて一日も早く完成するやうにと願はずにゐられませぬ。家は、

木造二階建（總建坪八五坪）總工費及び設備費一、〇〇〇〇圓一萬圓といふ豫算に對しては、かくも重要な仕事に使はるべき家の建設費としてあまりに小さすぎる事を注意して下さる方が尠くないのでありますが、然し、この「家」の計畫を發表して以來怒濤のやうに八方十六方から浴せかけられて來る期待と激勵のつぶてはこの「家」をはち切れさうにまで精一杯に生かして用ひずにはおかぬでありませう。私たちは實に、その力に驅り立てられ追ひ立てられて懸命に働いてるのであります。「家」の内容は

一、娯樂休憩のための靜かで快い部屋と相當の設備、二、圖書雜誌新聞ポスターの閲覽室、各種講習會講座研究會協議會等に使用する大中小室、科學的に設備整ひたる共同炊事場及び共同洗濯所、簡易宿泊室應接室、食堂、賣店、事務室、婦人相談所等を含む。

どうぞ「職業婦人の家」のために寄附を申込んで下さい。二十錢袋を充たして送つて下さい。あなたのまわりの方が一人殘らず募金に應じて下さるまでお口添をたのみます。お知らせ下されば何時でも出かけてゆきます。寄附申込み書及び募金袋發送の準備も出來てゐます。

この「家」の計畫を全ての婦人に傳へて下さい！



初産ユーモア

その一

婆『赤ちゃんのウンコやオシッコは舐めたつていゝのに、貴郎(あなた)ウンコがそんなに怖いやうじゃ赤ちゃんに愛情が足りないんだわ、ポカ〳〵するところをお髯(ひげ)の下に付けたげませう！』

夫『クハバラ〳〵』



初産ユーモア

その二

夫『ホラ笑つたよ、笑つたよ、やつぱり人間(にんげん)の子だ、笑ふんだもの』

妻『笑つたんじやありませんよ、口を動かしただけですよ、まだ產れて二月じやありませんか、今から笑つたら大へんですわ』

夫『俺の子だもの、キリン兒だもの、アハヽヽ、笑ふよ笑ふよア泣き出した、よく泣くねえ、お前の子だから、アヘヽヽ』

（田中比左良）

金解禁と地租委讓

稻宮又吉

金解禁物語

嘘つき紙幣

御手元に、御札——紙幣がありませうから、爲念に出して見て下さい、葉書より薄い紙の片に、拾圓と肉太く書いて、その側に小さく、此の券引換に、金貨拾圓相渡可申候也日本銀行と書いてあります、それならば、この紙幣を日本銀行へ持ち込んで、證文の文句通り其券引換に金貨拾圓相渡すか、什麼か、懸合つて御覧なさい、必ず渡して呉れません——如何に嘘つき全盛の世の中とは申しながら、さりとは、餘りにも鮮かな青天白日下の嘘つき振りである。這んな嘘は止めませうと云ふのが即ち昨今の金解禁論であります。

爲替相場とは?

乍然この金解禁論も嘘をつくのは良くないと云ふ、德義上の考へから出て來たのではない、嘘をついてゐる罰が經濟上そろ／＼強く當り出して來たから、堪らなくなつて、苦るしい餘りに云ひ出して來たのである。什麼風に嘘つきの罰が當るか、金貨を呉れると云つて、金貨を呉れない、即ち金貨及び金地金を國外へ出すことを禁止してゐるから、爲替の相場が次第に下がつて來る、そればかりでなく、その相場が常に變動するのである。何故下がり、何故變動するか、それを說く前に爲替相場のことを一通り知つてゐなくてはならぬ。

爲替相場を手短く話せば、日本の金貨百圓の中にある純金

分は二十匁である。それを假りに米國の金貨に引き當てゝ見ると、之が米貨で四十九弗三十二分の二十七（卽ち之を法定平價と云ふ）になる、つまり日本金貨拾圓拾枚を持つてをれば、純金分で恰も米國の金貨四十九弗と別に一弗の三十二分の二十七を持つてゐることになるのである。それだから米國で四十九弗三十二分の二十七の品物を買つた時に、其代金を米國で仕拂ふとすれば、日本金貨百圓の外に之を米國迄運送する運賃荷造費手間代等をつけて拂はなくてはならぬ、つまり金貨百圓（法定平價四十九弗三十二分の二十七）でも先方へ仕拂ひの段になると、それだけ引かれて勘定される、之が法定平價と云ふものに對して、爲替相場と云ふものが別にある所以である、尤も爲替相場だから、若し日本の方が米金貨の受取勘定になるときは、米國で四十九弗三十二分の二十七（そんな金貨はないけれども）を仕拂ふとしても、之を日本金貨百圓にしないで、矢張り運賃等を引いて勘定して遣るのは勿論である。處で爲替相場は、大體に於て送金勘定の多い方卽ち、支拂の金の多い方の國の相場が下がる譯になるのである。

百圓が七十五圓に

品物の買代金を、金貨で支拂ふ場合には、其支拂代金の運送上の諸掛りだけで、爲替の相場は立つが、金貨で拂はぬ、つまり金を融出せぬとすれば、現實の信用と云ふものがなくなるから、其國で百圓と稱してゐても、對外的には信用が薄くなるから圓價が下落するのである。

歐洲大戰當時日本の一圓に對して、露國の一留は一圓六錢位であつた、處で、露國が金を出さぬのみならず戰爭が不利になつて行くと、見る見るまに、日本の一圓價に對して何百留まで下がつた、現に張作霖の奉天票の如きも、日本の一圓に對して四千元位に下がつてゐる。奉天票が八千元と云つても日本の金でつまり圓貨では漸く二圓である。若し奉天票一元が其初めに日本の金でも一圓に當つてゐたとすれば、奉天票だけでは、二元の品物が八千元に上がつたことになるのである。これと同じく、日本が金融出を禁止しない頃に、爲替相場で圓價百圓は米國で四十九弗見當であつた、然るに大正十三年には三十七弗見當まで圓價が暴落した。と云ふことは日本の圓が從來米國では凡そ百圓は百圓——より少しく低く

まあ九十九圓位に取引されてゐたのが、三十七弗邊まで下がると云ふのは、折角の百圓が七十四五圓位にしか勘定をされなくなるのである。

爲替の投機化

日本の爲替相場がこの様に暴落すると、米國からすれば、少くない金で、從來よりも餘計に買物が出來る、これと反對に、米國の品物を買ふには、從來よりも餘計な金を積まなければならぬことになる。よしそれ程圓價相場が暴落せぬ迄も金貨を持つてすれば日米兩國凡そ對等で取引出來る筈のものが昨今の如く、四十五弗半見當であつて見れば、日本の百圓は米國で九十一圓見當にしか取引されぬのだから、日本は非常に不利益な立場に置かれてゐるのである、それぱかりでなく、この爲替相場が實際の取引以外に思惑即ち投機に利用される、現在に於て世界中の爲替投機は悉く日本の圓價に集注されて、極端に云へば上海あたりの圓價投機で日本の爲替相場は上下するとさへ云はれてゐる始末である。

それのみならず、日本政府で金解禁の意志ありと傳へられると、爲替相場は忽ち上がる、いや左様な意志はないと傳へられるとまたズン／＼下がつて行く、爲替相場が動揺すると貿易は輸出入共に自然に見送り狀態になる。と云ふのは、迂つかり品物を買つても、賣つても、爲替相場の高下で直ちに損せねばならぬことがある、然しまた利益のすることもあるが、要するに眞面目な取引が投機化されるのである。

不景氣と新平價說

圓價相場が低いから、日本の品を國外から買出すこと即ち輸出されるには、都合がよいが、外國の品を日本へ買取るには不利益である、從つて圓價相場が低ければ低いだけ品物の輸入は困難である、これが爲に若し金の輸出を解禁して、圓價の爲替相場が上ると、從來高く思はれた外國品は、幾分安くなるし、安く思はれてゐた日本品が高くなる譯になる。其處で爲替相場の上下を中心として、金の解禁否解禁の問題はかなりの渦卷を作つてゐるのである。紡績會社の様に、外國（米國）から綿を買つて之を日本で加工して其半分以上を外國（支那）へ輸出する様な商買は、爲替相場が上がると原綿が安く輸入されて、更らに綿製品の輸出に際して、受取勘定が多くなる。之に反して爲替相場が安い爲に、國外からの輸

入品の代價が日本內地では高廻りをする爲に、之が競爭品として內地製品も之と對抗して行けたものも、爲替相場が上がつた爲に、外國品が安く日本へ這入る。さうすると、內地の製鐵、製銅、製紙、化學工業、機械製作業の如きものは、非常な打擊を受ける、從つてこの仕事に關係のある人々は、極端に金解禁を惧れる、いや金解禁を恐れるのでない、金解禁によつて、經濟上自然の作用のもとに爲替相場が法定平價に近づく——現在の樣に低い相場のものが不意に法定平價近くに復することを惧れるのである。

そこで爲替が平價に復するまで待たう、又は、國民上下が非常な努力をして、相當の期間の中に解禁以外の方法で、爲替相場を平價近くならしめて、それから解禁させようと云ふ說等其他色々の工夫が出て來る、これが卽ち解禁尙早說である。そこで解禁卽行論は、尙早論がそんなに爲替相場が急激に平價に復するのを惧れるならば、平價切下げを行つたらよからう、日本の百圓が米國で九十五圓しか受取られぬならば法律を改正して金貨純金分を減らす、早い話しが從來二十匁で百圓だから十九匁で百圓にすると云ふ譯で、尙ほ新平價說を唱へるこれで遣る解禁の影響は左程でないと論じてゐるものもある。之は今後相當有力な輿論を作るであらう。

あはてた日本政府

金解禁と爲替相場は、これだけとして、爲替相場以外に、貿易決濟上我邦の如く引續き貿易出超の國では、直ちに夥しき正貨の流出を見るから、其處に通貨の收縮作用が起きて來る、金が少なくなるから購買力が落ちる、歐洲大戰當時、我邦に正貨流入して來て大いに購買力を增し大々的成金景氣を出したのと反對に、正貨流出によつて世の中は愈々不景氣になるであらう。

そこで、內地製造業は概ね前述の理由で衰微し、貿易は爲替高で輸出は振はず、輸入は內地の不景氣で思はしくなく、色々な理由で失職者も增加し、不景氣で勞銀の引下げも餘儀なくされるであらう、然るに、勞働者の生活必需品たる衣食住に屬するものは概ね餘り安くなるまい。尤も輸入品に屬する、ゴム、麻、羊毛、砂糖、鐵、銅の如きものは、値下がりをする筋のものではあるが、當業者の協定等によつて對內的には仲々下げまい。

さて斯う述べて來ると金解禁は、厭なことづくめだが、兎

にも角にも、これを徹底して經濟界の根本的立て直しを計らねば、何年たつても實際的に、經濟界は安定されないのである、殊に今に於て腹立つ位殘念なは、大正六年九月七日、米國が歐洲大戰の貿易大變調――殊に其輸出超過の逆調を鑑みて金輸出禁止を遣つた、處が日本の財務當局者も、あはてゝ何の考へもなしに同じく九月十二日に鸚の眞似鳥で、大藏省令を出し、金輸出禁止を遣つて金貨、金地金は勿論兌換券である處の紙幣までも、之を金貨に兩替が出來ず、不換紙幣の樣なものにして仕舞つたのである。

呆槍の罰

米國は變亂に因る大入超と見て正貨の流出を止めたのだ、然るに日本は變亂に因つて大出超國になつて正貨はドシ〳〵流入して來たのである、金貨の流れ込む國が、流れ出す國の眞似したのも、笑ひ物だが戰爭が濟んで、曩に禁止した米國は相當準備の上、大正八年の六月、之を解禁したのである。然るに米國の眞似して金輸禁を遣つた、日本は何の故か、今度は其眞似をせず呆槍として、之に追從しないばかりか、解禁などと夢にだも思はず、正貨のあるに委かせ、景氣のよいに委かせ浮いた〳〵で、官民共に、日を過ごしてゐたのである。其罰（好景氣の報ひもなくて、不景氣に泣いてゐる吾等は別だ）が今當つてゐるのである、これを見ても、今少し目先の見える人と、誠實の人が、財務當局でも政治方面にでもゐなくては、日本は駄目であることが能く分るのである。

兩稅委讓問題解說

地租と營業稅を、中央の財源より地方の財源に讓るべしと云ふ主張が、兩稅委讓問題の起りである。

此の問題の當否を考へるには、尠くとも、我邦の租稅の立前と、國庫歲計に就て一通りの知識を得て居らねばならぬが然し、現在代議士中でも、この歲計豫算に就て相當の見識のある人は極めて僅少であると云はれる程、かなり租稅及歲計の仔細は入組んだものになつてゐるから、それだけに就てでも此處で其全部を述べるのは、一寸六つかしい。

乍然極く大摑みに見て、租稅にも種々あるが、酒稅、所得稅、關稅、砂糖稅、地租、營業收益稅等が國稅としての重なるもので、之が國の收入卽ち、歲入と稱せられてゐるもので

ある。國はこの外、郵便電信と煙草鹽專賣等の益金を併せて之を歳入として、國の支出卽ち歳出に充てゝゐるのである、卽ち國は此の樣に主として租税を基調として歳入歳出を樹てゝゐるのである。これと同時に、地方自治體卽ち、縣、町、村も、各自に屬する支出に充てる爲め、前記の國の收入に屬する諸税に附加して税を徴收したり、或はまた別に家屋税とか戸數割とか云ふ其他種々なる雜税を地方税として創設してゐるのである。

處でだ。近來地方自治體の財政が、非常に困窮してゐるから、國税の中から、地租と營業收益税を地方税に移して、其財政を助けて遣らうと云ふのである。早い話しが、親父から子供も近來物入りが殖へたから、親父の持分に屬する收入の幾部を子供に割つて與へると云ふのである。これだけなら誠に結構な話しだが、處で此の親父の世帯は元來極道で貧的でなか／＼そんな呑氣な身分でない筈だ、現に國税を委讓するにしても遣繰ではないかと云ふのが、兩税委讓反對の骨子である。

卽ち正しく云ふと兩税委讓には、五個の反對理由がある。卽ち

一、地租七千萬圓、營業收益税五千萬圓合計一億二千萬圓を中央歳計より地方財源に移し、其補充を所得税の一部分增徴木材關税の增徴及び歳入の自然增收並に剩餘金の如きを以て之に充て、所得税一部增徴の外何等恒久的計算がない。

二、地租營業税の如き確實性の多きものを地方財政に移すことは、本流たる國の歳入をして不安ならしめる惧がある。

三、兩税委讓は、單に其徴收を地方に移すのみで何等減税の施設とは認められない。

四、兩税の如き徴收上煩雜なものを地方へ移すことは能率的でない。

五、地租は王土に貢ずると云ふ感じから國税と爲つてゐるものだ。

等々の理由であるが、然し是等の反對理由は、多く民政黨及其一派の主張であるが餘り重要性を有してゐない、各項とも決定的反對理由を爲さない。況んや、兩税は曩に、學者實業家官吏政黨、兩院の人々によつて組成せられた、税制整理委員會に於て調査研究の上別に財源を創設して地租營業兩税を地方に委讓すべし、と云ふことを決議をしてゐるものである。現在反對してゐる濱口氏の如きも、是が委員として參列

し兩稅委讓には贊成してゐる筈である。否濱口氏の率ゆる民政黨の前身たる憲政會は安達謙藏氏を筆頭として、營業稅の廢止すら第五十一議會には建議してゐる筈である、恐らく如何に厚顏なる政黨者流と雖も兩稅委讓それ自身には、眞向から反對出來ない筋のものである。若し兩稅委讓に反對であるとすれば、委讓そのものよりも、其財源と方法と時期のみが問題として議せらるものである。

然らば、此の際の財政處置として、兩稅委讓は妥當と見るべきか、否此の點に於て、現在兩稅委讓の當否を論じてゐるものゝ的は悉く外れてゐるのである、何となれば、政友會側の主張として、兩稅委讓は地方財政の救助にあると云ふのである、民政黨側の反對は、單に反對するのみで何等具體案を示さぬ、極めて莫然と、委讓の方法を攻擊してゐるのみで自家の案を示さぬのである。此の態度は公黨として甚だ惜しむべきものである。何れにしても、此の一事のみで既成政黨が如何に無能で誠意を有せず且つ黨略本位であることが分るのである。

即ち若しも、政友會側にして地方財政の困窮を認めて之を救助せんとするならば、何の爲に地方財政が今日の如く、切迫して來たかを考ふべきである、謂ふ迄もなく、地方財政の累年窮迫して來れるのは、全く以て義務敎育費の增加である試みに最近十年間の義務敎育費增加を調べて見るがよい、即ち大正四年度に於て、地方財政が敎育費の爲に、直接支出した金は七千四百萬圓であるのに、大正十四年では實に三億五千萬圓を支出して、方に五倍に近い數字である、此の外敎育費の爲に起こした、地方債の增加を併算すれば、より以上の額である、然るに、大正四年の地租は六千八百萬圓で大正十四年の地租も七千四百萬圓である營業收益稅は、同じく大正四年が、五千萬圓見當で、十四年は五千七百萬圓である、勿論此の間兩稅制に多少の修正する處はあつたにしても、十年間で五倍にもなる程の累進率を持つてゐる敎育費によつて次第に切迫し來れる、地方財政の救助に十年間何等の增加の趨勢を示さぬ地租と營業稅を振向けても、結局何の役にも立たぬことは、議論でなく數字即ち事實に於て明瞭至極な事である。これを如何にも手柄らしく且つ如何にも必要らしく主張してゐる、政友會の者共は數字の見えぬ無能にあらずんば、例の黨略本位の手品とほか見えない。

之を要するに、租稅制度としては、地租及び營業稅は地方

へ移すのが、正當である。乍然之によつて地方財政が救はれるとか、或は共財政の切迫が緩和される。と云ふことは明瞭な嘘である。と共に紊りに兩税委讓に對案を示さずして、反對してゐる者も眞面目な立場から云つてゐるのでない。民衆は能く之を見分なくてはならぬ。

ロオザ・ルクセンブルク

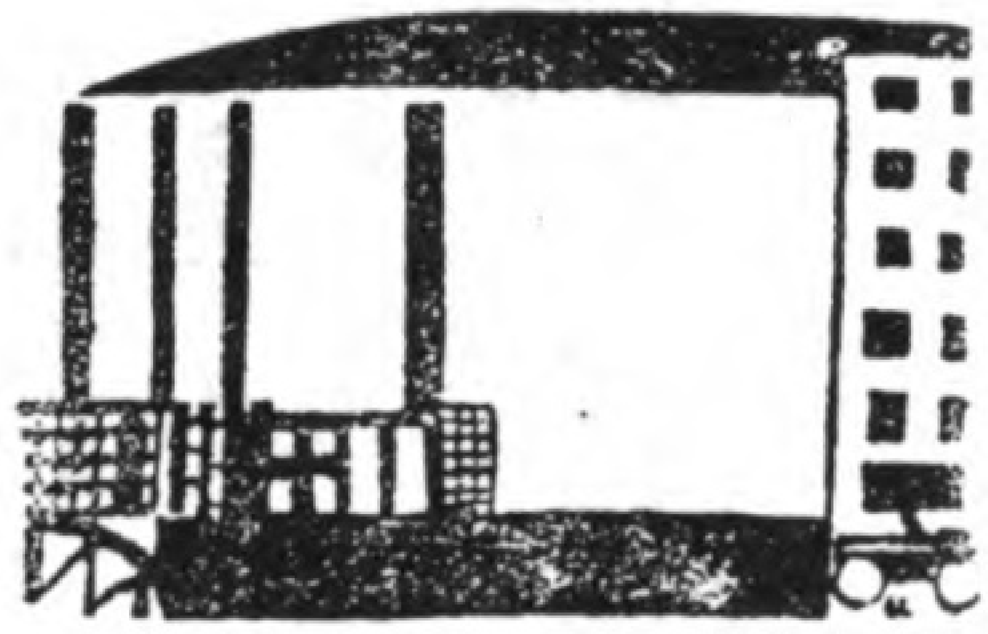
生田春月

ロオザは薔薇よ、薔薇なれど
サロンの、戀の花ならず
强權を刺す荊の花、
自由の愛に血と咲いて
嵐には散る鐵の花

波蘭の日、瑞西の日
獨逸の社會民主黨を
制せんための假りの結婚
ただ名ばかりよ、その夫は
ただ自由のみ、平等のみ。

健氣なるロオザはうれし
その血もて藝術を書き
詩を愛し、詩をば生きたる
ロオザは深き學者なれども
鬪ひの女、希望の女

わがロオザ・ルクセンブルク
いまだ生くべき道知らぬ
この國の乙女あまたに
正しく强く生くる道
君よ敎へよ、その血もて



市町村會の改選に備へよ

鈴木茂三郎

東京市會が疑獄事件のために解散されましたので、三月三日市會議員の選擧がおこなはれることになりましたが、これは一月下旬から今秋に亘つて全國的に擧行される市町村會改選の前驅として重要な意義を持つものであります。

それ故に私は、東京市會の選擧にのぞむにあたつて、私どもはどういふ見地から、市議戰に立たんとしてゐるかを、簡略に申上げて見たいと思ふ。そしてそれは同時に、全國的におこなはれる市町村會選擧に對する私どもの立場にもなるわけですが、私どもの見地、又立場と申しましても別に特別な立場に立ち、異様な見地に起つものではなく、市町村の公民又は住民として、會社なり教室なり或は仕事場に於て勞働されてゐる働くもの、即ち諸君の立場と見地を私がかはつてお話しするにすぎません。

一

諸君、吾々が、第一に知らねばならぬことは、市政は資本家及び地主の手に獨占されてゐるといふことです。

それは市制を見れば、すぐとわかることで自治體などと、名前だけは自治機關らしく申してはゐますが、自治體の政治機構は大資本家によつて支配權を握られてゐる中央政府のために、鼻づらを引きまはされるやうに、市制（町村は町村制）に規定されてゐるのですから厄介です。

例へば市の自治行政に對する内務大臣又は知事の監督權は極めて大きい。此の監督權は中央政府の都合のよいやうに利用されてゐる。昨年西久保市長は、或る方面より黄白をまかれて市會から追ひ出しを喰つたので、市會を解散しようとしたのでしたが、右の或る方面と中央政府とは、利害の一脈のつながりがありましたので、つひに市會解散を許しませんでした。

或は、さうした市長にしても、市會の推薦によつて市長候補があげられることにはなつてゐますが、市長たるには內務大臣の認可がなければなりません。ですから、左樣な監督權を中央政府が利用しまして、今日あらゆる重要な都市の市長は中央政界の政治勢力を握るものの息のかかつてゐないものは無いといつても、決して言ひ過ぎではないといふ狀態にあります。

市制による自治機關の機構の重要な部分を爲す市會は、然らばどうかと申しますと、市會は發案權も、執行强制權も持たないまことに他愛もないものであつて、おまけに市參事會などといふ市會を壓縮したやうな少數者に權限を與へて、市長とぐるになつて市政を勝手に遂行することの出來る仕組みです。

おまけに、市會議員の選擧權は、今回はじめて普選によつて市議選擧が行はれるとは申しますが、これには種々不都合なる制限がある。

御承知の如く婦人並に廿五歲以下の靑年男子には、被選擧權はもとより、選擧權さへ奪はれてゐる上に、廿五歲以上の男子で、選擧資格の絕對條件たる公民權を得るには二年以上の住民でなければならず、立候補するには二百圓の保證金をつまねばならぬといふことなど、その他市制には資本家又はその政治的代表者に有利な選擧制限が規定されてゐます。

二

右のやうに、自治體の政治機構の當然な結果として、市政は資本家又はその代表者の獨占の下に、その爲すがまゝにある。

市の財政はどうでせう。

市の純歲出額の二割五分は土木費で、二割四分六厘は市債費、二割三分一厘は電氣事業費にあてられ、社會事業費には一分三厘、公園、墓地費に一分二厘、保健費に六分九厘を支出してゐるにすぎません。

市債費は從來濫費されたところの市債に對する利拂ひが主たるもので、市債の現在總額は約四億七千萬圓、一戶當り四百廿三圓一人當り九十二圓になる。

次ぎに土木費の多いことは、震災復舊のために、已むを得ない支出には相違ありません。けれども土木材料の購入や、土木請負については、土木事業に關する資本家との間に、い

かがはしい風聞が少くない。私ども市民の知り得る範圍に於ても、無駄な材料の買入れや又無用な事業と思はれるものを多く發見するのであるが、それはともあれ、市の土木事業によつて個人的な利益を得るものは誰れかと言へば、土木資本家を除いては申すまでもなく地主と家主であることは極めて明白です。

例へば深川方面の地盛りをするために、市は土砂の分配をやつてゐますが、これによつて深川方面の地價や地代は、土地が高くなるに倍して、引き上げてひとり利得をむ貪つてゐます、同樣に道路が開けたり架橋されたりすれば、地代もあがる、又家賃もあがるわけで、家主はホク／＼ものです。家主は五年後には家賃で建築費をすつかり取り戻して了ふとのことですのに、家屋稅はその附加稅としての市稅と共に、借家人に轉嫁してゐます。

殊に來年度の增稅計畫によると、市は借地權稅、同取得稅をおこすとのことですが、そんなにまでして、借家人をいじめなくとも、土木工事その他の社會的原因によつて、ひとり利得をむさぼつてゐる地主や家主に、もつと／＼稅金を課することが當然ではないでせうか。

或は、廳費を御覽なさい。廳費卽ち市役所費は、社會事業、費と公園墓地費を合はせたゞけの二分六厘を支出してゐますが、雇員の平均給料は五十五圓、事務員九十七圓にすぎないのに、市長は二萬五千圓の年俸をとり且つ年俸五千圓の秘書二人迄を遊ばせてゐます。又市長の機密費は二萬六千五百圓電氣局長の機密費は一萬五千圓もある、それを何んに使用するかといへば、市議操縱費が大部分です。

隨分と、無駄な費用が濫費されてゐることは、これでもおわかりでせう。

しかも、それらは市民の一般大衆の負擔に歸するのだからやり切れません。

三

さらにお勝手元に影響する一つ二つの問題をとりあげて見ますなら、電燈、電車、瓦斯、水道の料金が高い。

電燈は東電と市電との間に、協定料金をつくつてゐますから、電力資本家たる東電の言ふがまゝになつてゐますが、大體が東電や鬼怒川電力から購入してゐる市電の電力料金そのものが、すばらしく高いのです。ですから市電の電燈料や電車賃が、それだけの理由によつても、高くなるわけです。

諸君は、かつて市電の電氣局長であつたところの大道良太氏が、突如として東電の重役に方向轉換したことを御存知でせう。それによつても、市電と東電との、たゞならぬ關係が察せられます。とりわけ瓦斯については、市との報償契約がありますので、東京瓦斯と市又は市會との關係は密接です。昨年郡部に東京瓦斯よりも、安い料金と有利な供給條件で瓦斯會社をつくりたいとの出願をしたものがありました。とこ

ろが中橋商相は大阪瓦斯との利害に密接な關係がありますので、東京に於けるやうに、大阪にも郊外に競爭會社を出願されては困るといふので、右の出願に許可を與へませんでしたが、東京瓦斯側はあわてゝ郡部に於ける擴張工事計畫を建てたのです。

郡部擴張まことに結構です、ですけれども市內の供給狀態も決してよくはありません。

且つその普及率より言ひますれば、全戸數の半數に達するにすぎないのですから、市會又は市當局としては、東京瓦斯に對して、さらに市內に對する擴張計畫の遂行を迫るべきでありましたのに、彼等は勇敢に沈默しました。此の沈默は何事を物語るでせうか。

四

板舟權問題、京成乘入れ問題の疑獄や不問にふされた瓦斯事件などは、何事を物語るかを、雄辯に物語つてゐるではありませんか。

然るに、市會選擧に際して、市會の革正だとか、淨化だとか、まことに騷がしく囃し立てる資本家（又は地主）の代表者たる政治家や御用學者などがあります。

前回の市會選擧にも、資本家の利益を代表する三木一派が市政刷新聯盟といふ選擧團體をつくつて、まんまと市會を政友會の手から完全に奪取しましたが、その結果はどうでせう。三木一派は今回の疑獄事件の中心勢力ではありませんか。

或は、同様に前回の選擧に、後藤伯爵一派の永田その他の知名の人々によつて、市會の革新運動がおこなはれました。

これは選擧戰にはもろくも敗れましたが、此の革新運動の資本的背景は、後藤伯の政治的支持者たる日魯漁業一派であつたことは今日かくれない事實です。

かうした資本家のあやつる市會の革新や刷新の叫びは、市政における益權を自派のために分捕らふとする野獸の聲にもひとしい。斷じて彼等の手によつては、市政の革正はおこなはれない。

これをおこない得るものは、諸君と吾々のみである。

市會を無產階級の手に！
資本家に重稅、無產者小市民には減稅！
市長の公選、市參事會の廢止！
市會の選擧權を廿歲以上の男女に！
自治權の徹底的擴充！
電燈瓦斯水道電車賃値下げ！

かうしたお互ひの、眞の要求のために起つもののみの手に市會の革正と市政の刷新を遂行し得るのである、

かゝる私どもの見地と立場は、それは直ちに全國の市町村の自治體に對しても、あてはめることが出來ませう。

人生の乞食

秋である。朝の太陽がうらゝかに照らしてゐる。何處か郊外と云つた感じの街道。

一人の放浪者がブラリ〳〵とやつて來る。空腹である。その鼻へ食慾をそゝる朝餉の匂ひ！　見れば或る家の窓の中で、年輩のオヤヂが食卓に向つてゐる。

「すみませんが、一杯振舞つて下さいな。」

聲をかけてみたが相手は返事をしない。身動きもしない。ヘンだと思つて近寄つてみる。男の額に彈丸の痕！　男は殺されてゐたのだ。

アッ、と思つた時、二階にガサ〳〵と云ふ物音がする。振り仰ぐと氣遣はしげに來客を覗つてゐるのは美しい娘。これがルイズ、ブルックスの役で、放浪青年リチャード、アーレンを初めて眼と眼を見交はすのだ。

「一體これは如何したんです？　誰が殺したんです？」

青年は訝かしげに訊く。娘は、あどけない顏で、オド〳〵しながら答へたのである。

「私が殺したの。ほんの今！」

それは何故？　と訊かれて語る女の身の上、それに由れば、娘は孤兒院から此處へ貰はれて來たんだが、年とつて來るに從つて、養父の樣子が變つて來た。此の頃は、言ひ寄つてさへ來るやうになつた。今朝も今朝とて食事半ばに、手籠めにあはせやうとしたのが恐ろしさに、傍にあつたピストルを向けたら、思はず知らず彈丸が出て、おやぢさんはあの始末、私もこれから如何しようかと、案じながらも途方にくれて居りますとの事。

さうか、それは氣の毒な、いや、御尤もなお話だ。僕も同情せざるを得ない。何はともあれ、此處で長話は身の破滅、早速逃げ出さなければいけない。さ、僕と一緒にいらつしやい。青年はこんな事を語つて娘の手をとつて外に出た。

娘を逃がしてやるために、娘を道伴れにして歩く。考へれば急に變つた境遇だ。

娘を道連れにする、何のために？

娘を助けてやりたい、何のために？

それはハッキリとは分つてゐない。けれども助けてやるのが何となく當り前に思はれてならなかつた。道連れにしてやる、それが一番娘にとつて安全な道と思はれてならなかつた。——が、何時までもさうは行かない。或る鐵道線路に來て、とう〳〵青年は口を切つた。

「貴女は汽車に飛び乘つた事がある？」

「………」

女は答へなかつた、か微かに頷いた。それではと、折柄來かゝつた汽車へ飛乘らせやうとすると、娘は烈しく跳ねとばされて了ふ。仕方がない、手傳つてやれ、と、青年も共々別な汽車に飛び乘つて道を急いだ。映畫では此の邊の場面が實にいゝ心持ちに運ばれる。

さて夕暮れ、そして晩が來た。二人は片田舍の、乾草の中にもぐつて眠る事になる。

丘の中腹の畑、下を見ると、ほのかに明るい灯影が下の家々から漏れて來る。あゝ、あそこにも團欒があるんだ、と放浪者は何時にない吐息をもらす。娘も、あんな所に住んで居る人々は、自分より

は遙かに樂しく仕合せなんだらうと思ふ。
やがて月が出た。二人は顔を見合はせる。
「ね、我々はこんな冷い所に寢るのに、世間の人は温い思ひして寢られるんですね。」
「さうね。……あたし、一度でいゝから……」
「えゝ？」
「……何か平和な、温い家庭ッて云ふものゝ中に暮らしてみたいと望んでゐるのよ。」
「………。」
「貴方、一體何を望んでゐらつしやる？」
「望み……？ さうですね。人間は誰でも望む者ですね。何かいゝ



事があればいゝ、何か仕合せが巡つて來ればいゝ、と思つて、何も惠みを待つてるんです。人生は、まア乞食みたいなものですね。」
そして、別に望みはないんですと云ふ答へだ。こんな話がすむと間もなく二人とも旅の疲れで眠むつてしまふ。
夜が明ける。又旅の空。
いろんなエピソードを作つて、又夜が來る。今宵の宿は何處に……とあてどもない男と女は歩みつゞける。不圖前方に見えた火！火を巡つて五六人の人影が動いてゐる。
近づいてみると、乞食の群れだ。ハッとしたが、自分たちを彼等との間に、別に差別のある身の上ではない。放浪者と殺人犯とではないか。其の中へとび込んで二人は一餐を振舞つてくれと頼む。乞食の親分はこれを見てどうもタダ者ではないと思ふ。いろ／＼と二人を調べてみて、互ひの素性を知る。知つてみると助けないわけに行かない氣の毒な二人だ。
突如！ 其處へ警官が現はれる。乞食の群と警官との爭ひ！
乞食は青年も娘も共々來かゝつた汽車にとびのつて高飛びする。物語は此の汽車へ移る。夜の汽車、廣々とした闇の野、山、谷！
そして又翌日！
警察の手は列車にも延びて來た。乞食頭は二人を自動車で遠く落す。そして警官隊を迎へて烈しく戰ふ。
汽車の火事、ピストル！
映畫は乞食頭が警官に殺される所で終つてゐる。二人は無事に逃げられるに違ひない。
餘白がないから詳しい事は省略する。映畫で見ると非常に面白く愉快で、何か深い感激が殘る。監督は「つばさ」を作つたウエルマン。原作が人氣作者ジム・タリー、そして脚色がフランツ・セルナーを英米に初めて紹介したベンジヤミン・グレザーと云ふだけでも觀客を失望させない事が保證される。

長詩

松井須磨子

〔第二回〕

高群逸枝

二十三

男の
あまさを
知らない
女は
お馬鹿さんだ
かささぎのやうな
震え聲で
彼がいふのを
何かときけば
「井戸の中に
ナーミサスが
死んだやうに
君の中に
俺は
死んぢまつたよ」
何て
音樂の
天才だらう
すべての
男
といふものは

二十四

すべての

男が
大膽な
行動の前に
もつ
震え聲

それが
序幕で
その
次は
勿論
あまい
火のやうな
溜息

だが
そのさきは
云はなくて

いゝ
上から
じつと
見てたのは
お前だつたの
山櫨の花よ
そんなら
内密で
ゐて
お呉れね

二十五

かくて
いつのまにか
二人は
戀を味はつた
畏敬してゐた
前澤は
いまや
最愛の
戀人だつた
そして
最愛の
戀人は
まもなく
最愛の
夫だ

二十六

時は

明治四十二年
渦まき立つ
演劇革新の運動

イプセンの社會劇
ジョン・ガブリエル・ボルクマンが
小山內薰市川左團次
協同のもとに

初めて
有樂座の
舞臺に上つた時

小ボルクマンの橇が
雪を蹴立てゝ
坂道を
下りて行く

あの
悲しげな
銀の鈴の音

おお
そは何と
奇しき響であつたか

何と
エクゾチックな
新しい森の
曙なりしよ

かゝる
機運に乘じて
博士坪內逍遙が
投げた
巨大な火

おお
その火渦の中こそ
わが新女優なる
可憐な須磨子が
必至の技藝を
花咲かせて

新時代來る！の
うぶ聲を
一聲高く
擧げた活舞臺

二十七

初め
坪內博士の
文藝協會が

男女優を
募集したとき
須磨子は
夫、前澤の
友人の紹介で

おづおづと
志望を
申し出た

その時の彼女
女優志望者として
初めて現はれてきた彼女

その彼女は
可なり
見すぼらしいものだつた

都會的でもなく
純粹の
田舎者でもない
非藝術的な彼女

博士邸の玄關番に
まづ見くびられた彼女

博士が進つて
學力を
試し
人物を
考査する

さうしても
取柄のない
彼女だつた

だが

われわれは
かの世界的名女優
サラベルナールを
思ひうかべる

彼女もまた
さうであつたのだ

二十八

だが
兎もあれ
彼女の願ひは
容れられた

同期生達
中にも
山川浦路のごときは

才色ともに遙かに秀れ
衆望を
一身に
あつめたかの觀があつた
然し
われらの須磨子は
その中に
あつて
さも權威あるもの丶やうに
わきめも
ふらず
まつしぐらに
自分の道を
進んで行つた

二十九

粗末な着物に
前垂姿で
彼女が通ふ
余丁町
輝やかな
朝
そして
夜
長い間の
惑ひだつた
この世
そこへ
一つの
光が
現はれ
榮光の
岸邊へ
誘なひ行く

三十

ああ
歌はんか
さなくば
泣かん
短かい
一生
耐へきれぬ
苦勞

此れは
何の
意味だらう

そこには
どんな
價値が
あるか？

意味も
ない
價値も
ない

そんなら
いつそ
死んで
しまはうか

それは
馬鹿なことだ
まはりに仲間が
ゐないぢやなし

いいえ
ゐません
たつた一人の
仲間すら

彼等は
笑ひます
氷のやうに
冷めたく

そして
嫉みます
いつも

こつそりと
人の
寢靜まつた
暗い
窓の中

嘆きは
しないが
兎もすれば
悲しくなる彼女

三十一

とはまた
なぜだらう
神さま
それはかうです

わたしどもの須磨子は
あまり
複雑なんです
まるで
單純そのもののやうに

かういふ批評の
あてはまる彼女
彼女は
一種の女性でした

女性である前に
人でした

女性が
人であるほど
恐ろしいことはない

女性は
愛される
が
人は
中々
さうでない

三十二

いまや
見よ

逆流の中を
行く彼女

波を
おしわけ
岩角を
摑む

愛か
憎か

憎で
行きませう
それが
愉快ですから

理性か
本能か

本能で
行きませう
それが
順序ですから

かくて
見よ

凝血を
塗りかぶり

まなこは
さながら
紅玉の
烈火と
猛つて
鬼ピルラスが

老ひたる
王を
追うがごと

三十三

觸るるもの
皆
燃えんず
情熱

可愛いや
須磨子が

いかづち
虚空を
裂くごとき

獅子
ふんじんの
幕は
切り落された

まつさきがけの
血祭に
水もたまらず
打ち落された

それは
結婚生活

それは
彼女を
しばりつけてゐる
最も手近かな
鐵の鎖

三十四

一年あまりの
月日が
過ぎては

戀の
我儘は

結婚の
氣儘

前澤との
衝突も
度重なり

昂じては
火のついた
ランプを
投げ飛ばし

激しては
刄物三昧

それが
靜まつた時
——そは神ぞ知る

電光の
一閃で
戀に落ち

二度目の
光で
別れる

それが
浮世

では
さようなら
あなたや

ほんに
いとしい
あなたや

ほんに
思へば
夏の夜の
短かい
ちぎりで
ありました

ほんに
それは
うたゝねの
小さな
夢で
ありました

そんなにも
儚ない
戀で
あつたけれど

ねえ
いとしい
あなたや

草を刈り
小鳥を默らせ
業慾煩惱を
募らせる

氣まゝ
勝手な
春の宵

あれ
照るわいな
空の星
どうやら
泣けと
いふやうに

——(つゞく)——

作者附記

わたくしの貧しい試みに對して、思ひがけなく多くの讀者諸君から、お懇ろなお手紙を頂きましたことを感謝いたします。今回分の原稿は、病氣のため短いものになりまして、私としても殘念ですが次回からは、もつと長いものにしたいと思ひます。



ボルセヴィキのマリヤ

ア・ネウエーロフ

ボリシエウイチカのマリヤ

我々の所にさう云つたのがゐた。背の高い、胸の張つた女で、眞黒な弓のやうに跳上つた眉をもつてゐた。所がその夫は指貫位。コゾーノツクと我々は彼を呼んでゐた。小汚い帽子――にでも這入つてしまいさうな男である。而も恐ろしく怒りつぽい。マリヤを怒鳴りつけて、まるで鍛冶屋がハンマーでするやうに、机を毆りつける。

「殺すぞ! 魂をひつこぬいて呉れる……」

所がマリヤは仲々ずるい。喫驚したやうな風をして、殊更に彼に丁寧な呼びかけをする。

「プロコーフイ・ミトリツチ! プロコーフイ・ミトリツチ! 一體どうしたのお前?」

「首つ玉を引つこ抜いて呉れるつてことよ!」

彼女は更に優しく――

「私今日粥をこしらへたんだよ。欲しくない?」

皿に溢れる程盛つて彼に與へる、その上バタを入れる、バタの星を作つてやる。恭しく立つて、結婚の時のやうに彼を饗應する。

「お食べ、プロコーフイ・ミトリツチ、私が惡かつたのだから……」

彼は得意である――女が、彼を親切にしてゐるのだから。鼻を上に向けて、大きい力を感ずる。

「欲しかねえ!」

所がマリヤは女中のやうに彼に事へる――水をもつて來る

煙草入を搜す。小屋の眞中で履物を脫ぐ。——靴を片附け靴下を爐の下に押込む。夜、彼を手にとつて、鬚を撫で、猫のやうに耳許で撫聲を出してやる……コゾーノツクは彼女を抓る——微笑んでゐる。

「何だつてお前、プロコーフイ・ミトリツチ！　痛いぢやないか……」

「當り前よ、痛いのは……壓つけたんだから……」

　そしてもう一度抓る——俺は夫なんで他の百姓ぢやないんだと云ふ。かうして心を柔げて置いて、彼女はそろ〳〵初める。

「やい、コゾーン、コゾーン！　私が二度ばかり毆り附ければお前なんぞ何處かにすつ飛んじまふ……お前は私が木で出來てゞもゐると思つてゐるのかい？　こんなろくでなしの爲に苦しむのが口惜しくないと云ふのかい？……」

　以前にはマリヤはその性格を現すよりも、より多く自分の中に家庭上の不愉快をしのんでゐた。所がボリシエウイキーが自由をもつて現れて來て、お前達は今ではもう男達と同等の地位にあるのだと云つて、女達にも分前を與へ初めるやうになると、そこでマリヤは眼を開いた。何かの辯士が來た——彼女は直きに集會に飛んでゆく。まるで、恥を忘れたやうだ。或時など辯士の所に近づいて行つて、まるで娘のやうに眼で合圖をしてゐる。同志、家にお茶を飲みに行きませう、と云ふ。コゾーノツクは勿論そこにゐたのだ——つまり眼の前で浮氣をしたのである。彼の眼は暗くなつた、鼻の孔はまるで硝子壜のやうにふくれた。我々は彼が集會の席で眞直ぐ彼女をひつつかまへるかと思つた。でもとも角怺へてゐた。脇腹から近づいて行つて云ふ——

「家に行かう！」

　所が彼女は故意でゞもあるのだらう……辯士の席に立ち上つて我々に演說を初めた——

「農民諸君！」

　我々は全く大笑ひ。そこでコゾーノツクももう堪忍の緒を切つてしまつた。

「辯士さん、その女を引張り出して下さい！」

　家に歸ると拳骨が彼女の上に飛んだ。

「魂をひつこ抜いてやる！」

所がマリヤは馬鹿にしてゐる。
「こゝの家で騒いでゐるのは誰だらう、プロコーフイ・ミトリツチ？　物凄いけれども少しも恐かない……」
「貴樣が若しも集會になんか行きやがるなら、俺は貴樣のスカートを切離してやるぞ！」
「斧の方で云ふことを聞かしないや。」
　コゾーノックは激昂して、打つものを捜してゐる、マリヤは威嚇するやうに――
「私に觸れでもしようものなら、――壺をお前の山羊頭にたたきつけてやるから……」
　これから初つたのである。コゾーノックが自分の權利を振廻せば、マリヤは自分のを振廻す。コゾーノックが寢臺の上に寢れば、マリヤは――暖爐の上に。コゾーノックが彼女の所に來れば、彼女は彼から去つて行く。
「駄目だよお前、今は昔と違ふんだから。もうおしまひにしてよい時が來たのだよ。」
「俺の所に來い！」
「嫌なこつた。」
　コゾーノックは跳り跳廻るが、而もそのまゝ冷い蒲團の中に寢なければならない。そして遂にかう云ふことにまでなつてしまつた――全く可笑しな話だ！　彼女は子供を生まなくなつてしまつたのである。二人生んだ子は――葬つてしまつた。コゾーノックは三人目を待つてゐるのである、がマリヤは云ふことを聞かない。こんなことを云ふ――私はこんな惡戲には飽き飽きしちやつた。
「どんな惡戲だつて？」
「こんなさ……お前は一度だつて生ましないんだらう？」
「當り前よ、俺あ――あまつちよちやねえんだ。」
「ぢや私だつて――牛ぢやないんだからね、毎年餓鬼をお前に拵えてやるなんて。拵えたくなれば、生むんだ……」
　コゾーノックは逆上する。
「貴樣がそんな言葉を云ふんなら、俺は貴樣の首を引つこ拔いてやる！……
　マリヤも負けてゐない。私は不生女になつたんだと云ふ。
「どうして不生女なんだ？」
「私の血が乾いてしまつたのさ……若しお前が私を縛つて置かうつて云ふんなら――私は、お前の所から出て行くばかりだ。」

男を袋町に押つめてしまつた。前には街で笑談を云つたり、隣近所を歩き廻つてゐた彼が、これから後は何處にも行かない。煖爐の上に寢る、まるで男やもめのやうに横つてゐる。少々毆つてやりたいが、さうすると出て行つてしまふ。そればかりではない、裁判に引張り出す、所がボリシエウイキーと云ふ奴は必ずこちらに刑罰を宣告する――女を甘やかすことが奴等の流行なんだから。全然氣儘にしてやつてもよいが他人に恥かしい、喫驚したのだ、意氣地がない、と云ふだらう、二度易者の所に行つたが、相手にしない！　マリヤはマリヤで組合のクラブから新聞や書物を借出し初めた。テーブルの上に大きな卓布をひろげたかと思ふと、何處かの女教員か何かのやうに坐つて、唇を動かしてゐる、聲を出して讀まない。コゾーノツクは、勿論、默つてゐる。讀むならかまはない、唯、家から外に出るな。時々殊更に彼女をからかふ――

「電報を逆樣に持つ癖に……たいした本讀みだ！」

マリヤは見向きもしない。所が書物だとか新聞だとかは、人も知るやうに、人間を吸込んで、まるで異ふ人間にしてしまふ。マリヤも亦この所まで來たのだ。窓の外に瞳を凝らして眺めてゐる。そしてこんなことを云ふ――あゝ退屈だ……

「一體何が爲たいんだ？」――とコゾーノツクが訊ねる。

「何だか……こゝにないものが……」

コゾーノツクは惱んだが、到々我慢が出來なくなつて來た。

「俺が一つ喰らはしてやる、貴樣の頭は惡魔につかれてゐるんだ！　貴樣は餘計なことを考へるからだ！」

所が彼女は實際、多少夢中になり初めた。男の仕事に嘴を入れた。村に集會があれば、彼女が突立つてゐる。百姓達は怒り初めた。

「マリヤ、菜汁でも煮ろ！」

それどころではない！　唯、眼の向くところ。婦人部とか云ふものを考へ出した。こんなものは言葉さへ我々は聞いたことがない――多分ロシヤ語ではないのだらう。見てゐると、一人の女がやつて來る、また他の女が來る、何と云ふことだ！　コゾーノツクの小屋で講習が開かれる。集つてぺちやくちや初める。ソヴエートの委員長が彼等の所に行き初めた。彼はこの村のものだ。我々は以前ワーシナ・シリヤプーノツクと呼んでゐたが、彼がボリシエウイキーの仲間に這入るやうになつてから――ワツシリー・イワノウイツチに變つた。

そこでコゾーノックはすつかり溫和しくなつてしまつた。一言でも云はうものなら、十の聲が彼に向つて來るのだ。

「さあ、さあ、默つておいで！」

委員長は勿論、女達の肩を持つ――それが彼のプログラムなんだ。今ぢやプロコーフイ・ミトリツチと――彼は云ふ――婦人を怒鳴るやうなことは出來ないのです――革命ですからね……所で、彼は馬鹿のやうに笑つてゐるより他ないのである。心ではこんな革命なんか眞二つに引裂いてやりたいと思ひながら――しかし何だか恐い、面白くないことが起るかも知れない。しかもマリヤは益々無遠慮になる。私はボリシエウイキーの黨にすつかり這入つちまいたいと云ふ。コゾーノツクは彼女を恥かしがらせ初めた。お前は恥かしくないのか？　と彼は云ふ、お前には良心がないのか？　でも結局神樣はお前のこんな行ひを我慢してはいらつしやらないだらう。

マリヤは唯鼻であしらふばかりだ。

「神樣だつて？　どんな神樣さ？　お前は何處から考へ出したんだ！」

まるで氣違ひのやうになつてしまつた。しかも委員長には何も遠慮しない。彼は彼女にボリシエウイキーの書物をもつて來て彼女の頭を混亂さす、彼女は唯滿足して顏を紅らめてゐるばかりだ。或時二人が肩を並べて机に坐つてゐたことがあつた。彼等は小屋の中には二人だけだと思つてゐたのである、所がコゾーノックは寢臺の下に隱れてゐた――で嫉妬が彼を苦しめ初めた。ズックを床まで垂らして、穴の中の鼬のやうに坐つてゐた。委員長が云ひ初める――

「あなたの夫はつまらない男ぢやありませんか、同志グリシャギナ。どうしてあなたがあんな人と生活してゐるんか分りませんな。」

マリヤは笑つてゐる。そして云ふ――

「私はもう四ケ月もあの人と生活してゐないんですよ……二人の間は唯被ひだけなんです……」

彼は彼女の――手を取る。

「どうしてそんなことがあるもんですか？　私はさう云ふことには一切信じないです……」

と云ひながら自身は彼女の眼の中をうかゞつて、次第に近く彼女の方に身を寄せる。腰の少し上の方を抱いて、支へてゐる。云ふ――私は大變あなたに同情してゐるのです……

コゾーノックは寢臺の下でこれを聞いて何か氣分が惡い時

のやうになつた。二人を打殺す爲に斧を取らうとしたが――恐ろしい。で頭をズックから突出して眺めてゐる、と彼等は彼を嘲笑つてこんなことを云ふ――私達はお前がズックの下に坐つてゐることを知つてたんだよ……

我々はソヴエートの改選をすることになつた。女達はまるで市場にでも行くやうに飛んで歩いた。我々はそれを騒ぎ押合ひ、そしてマリヤの名を叫んでゐるのを聞いた――

「マリヤを！　マリヤ・グリシヤギナを！」

誰か我々の一人がわざとかう云つた――

「お願ひしよう！」

皆は巫山戯てゐるのだと思つてゐた、所が氣がついて見ると、實際さうなつてしまつたのである。女達は、鴉のやうに男達を突つく――色んな後家やら、兵隊の妻やら――まるで雨雲のやうだ。しかも村の人達は役目につくのをたいして望まない。殊に今時では。――手を振つてしまつた。マリヤならマリヤでもよい。火傷するまでやらして見るさ……

所でマリヤの投標を數へて見た――二百十五票！　委員長ワシリー・イワヌイツチは演說で、彼女を祝福した。さあマリヤフエドローフナ――と彼は云ふ――あなたはわがソヴエートに於ける農民代表の最初の婦人です。仕事について下さい。私はソヴエート共和國の名をもつてあなたの名を祝福しあなたが勞働プロレタリアートの利益を支持されんことを希望します。

マリヤの眼は大きくなり、頰は紅色で蔽はれた。彼女は笑ひもしないで立つてゐる。私は、と彼女は云ふ、やつて見ます、タワーリシチ！　若しも私が何も出來ないとしても私を責めないで下さい。私を援けて下さい。

コゾーノツクはこの時すつかり氣を腐らしてしまつた。第一に、皆が彼を嘲笑してゐるのだか尊敬してゐるのだか、彼には分らない。彼は家に歸つて來て考へる。「これからどう云ふ風に彼女と話したらいゝんだらう？　お役人だからな。」我我にも何だか變だ何だか惡戯をしてゐるやうだ。百姓女が突然――地方ソヴエートで我々の事を決めるなんて……

我々はお互ひに罵り初めた――

馬鹿な！　こんな役目に女を置くなんちうことがあるか。

ナザーロフお父つあんはマリヤに面と向つてかう云つた。

「おいマリヤ、手前の行き場所が違はしねえか。」

だが彼女は頭を振るばかりである。

「村會が私を選んだよ――何も私が自分で行かしない。」
後になつてソヴエートに行つて、彼女を見ると――まるで別人のやうだ。机を置いて、インキ壺、靑と赤の鉛筆が二本側では書記が紙に何か走書してゐる。彼女の奴、髮まで違つた風に作つてゐやがる。そして頁に眼を走らす。これは――と彼女は云ふ――食糧問題についてですか、タワーリシチ・エレメーエフ？

「ラ、ラ……」紙の上に姓を書いて、再び何處かの長官のやうに――

「謄本は出來てゐますか？　早くして下さい！」

我々は全く眼を信じられない。これがあのマリヤなのか！！一度位額を赤らめてもよささうなものだが……我々に向つて誰彼の區別なく「タワーリシチ」呼ばはりする。或時クリモフ老人が來た所が、彼女は彼にも同じ言葉だ――何か御用ですか、タワーリシチ？　所が彼はこの言葉に我慢出來なかつた――こぶを踏まれるよりもつらい。彼は云つた――例へお前がソヴエートの役員でも、俺はお前のタワーリシチぢやねえ……しかしそんなことで彼女を喫驚させることが出來ようか？　唯笑つてゐるばかり、一月たつと鎗のついた帽子をかぶり、男のルバーシカを着、帽子には星をくつつけた。コゾーノツクは悩み悩んで、彼女に離婚を頼み初めた。こんな生活から俺を自由にして與れ、――と彼は云ふ。俺はやりきれない……他のもつと相應しい女を探す。所が、マリヤは唯手を振るばかり。

何卒――ツと彼女は云ふ――私はもうとつくに承諾してゐるんだよ。五ケ月の間彼女は我々の村で勤めてるだが――しまひには鼻につき出した、と云ふのは彼女は非常にボリシエウイキーの手を支へてゐたのだが、他の女達も彼女から傳染して來た。彼女が鼻を鳴らすと、他の女も鼻を鳴らすと云ふ風で、ある二人の女は全く夫から去つてしまつた。皆はかう云ふことからもう逃れることは出來ないのだと考へてゐた。所がそこに小さな出來事が起つた――コサツク兵が襲撃したのである――とマリヤはボリシエウイキー達と馬車に乘つて行つてしまつた。何處に行つたのだか私は知らない。隣の村で誰かゞ彼女を見たやうにも云つてゐた、がそれは彼女でなくて、誰か彼女に似た他の女だつたのかも知れない。この頃はかう云ふ女が隨分多くなつて來たから。

健脚家は狂ひと認める方針

葵イツ子

庭に咲いてゐる梅の花が多くなつたとか、廊下に妻が佇んで抱いてゐる狗の子が大きくなつて來たとかいふことが話草になつて、下村の日曜は消耗されてゆく。それも一週間振りのことであつて、何でもない單純さを貴重なやうにまで思つてゐる。

「斯ういふ方がお見えになりました。」

下村は女中から名刺を受取つて見ると、舊友の紹介で訪ねて來た人である。

「應接室へお通しゝて呉れ。」

妻が、

「誰方？」

と質ねた。

「岡君の紹介だ。」

彼は名刺を妻に渡すと、

「まあ、さうでムいますか、岡様も暫くお便り伺ひませんでしたわね。」

「會つて來やう。」

と彼は微かな興味を持つて部屋を出た。應接室の扉を開けると、廿七八の髪を長くした青年が、腰掛けてゐたが、下村の姿を見ると立上つた。下村は卓子の近くまで進んでから、

「よくおいで下さつた、私が下村です、さあお掛け下さい。」

「はあ。」

冷靜に角のある返事をして青年は直ぐに腰を掛けた。

「岡君とは、ずつと御懇意ですか。」

「いや……僕は今日伺つたのは川上のことなのですが、どうして狂ひでもない川上を狂ひとして診斷なさつたのですか。」

「…………」

「あなたが特に惡意は無くても、杉原病院に勤務される限り職務上止むを得ずさうされてゐるのでせう。だが、問題は重大です。」

下村は口を緘してゐた。眼を落して卓上の灰皿を見て居た。青年は此方を凝視してゐるらしい。

「あの病院の以前の院長の錢田氏の頃から、あなたは勤務されてゐるのですか。」

少し經つて下村は答へた。

「さうです。」

「その錢田氏は、今警××に勤務して居ますね……川上は社會運動をやつてゐて、要視察人になつてゐますが、精力家であるし、非常に足が丈夫です。だから尾行が、いつも撒かれて困つて仕舞つたらしいのです。然しそんな事の爲に×人といふことにして不當な監禁をするのは甚だしい違法じやありませんか……川上は夜中の二時頃に起きて、それから何里も歩いたことなどあるさうですから尾行はしきれないし、檢×期間には限りがあるし、監獄に入れるのには罪科が無いし、それで錢田氏が虚僞の病名を附したのです……どうですか？」

下村は挫かれて仕舞つた。默つた儘で居る。
「彼ばかりでは無いさうですね、財産爭ひをやつて、一方を狂人として、あの病院に押し込めたことなどは新聞に發かれたこともありました。だが、川上は警××にさうされたのですね、警××の依托として入院させられてゐますね……あなたも川上を狂人として診斷されてゐるのであるが、私に對して責任を持つて、本當のことを答へて下さることをお願ひしたいのです。」
下村は決意して顏を上げた。
「川上には狂暴性があるのです。これは病院の記錄に明らかにしてあります。」
「それは拷×された時のことでせう！　そんな場合は總ての人間が狂暴になりますよ、人間の總てがね。」
「…………」
「あなたの良心は咎めませんか。」
「…………」
何處まで詰問するのだらう。下村は先刻から精神的に要塞を構へて了つて、どんなに罵倒されても、それを默過するやうになつて居た。
「正氣な人間一人を一生あゝいふ風にして監禁して置くといふのは何といふ悲慘事です。親類の者が行つて退院を迫ると「此處は×立の病院で、院長は×大の博士だ、病氣が治つたら、置いて呉れと賴んでも置くことは出來ぬ」と撥ねつけて仕舞ふのです。食物は監獄よりも惡い。運動には絕對に出さぬ……」
下村は反問した。
「さういふことを言はれるのは何を根據にしてゐるのですか。」
「或る面會人　川上の室の前を通つた時に、小さい紙片を投げて寄越したので、拾つて置いて家に歸つてから讀んでみたのださうです。初めには、どうせ狂ひの惡戲だと思つたのださうですが、よく見ると實に文章も潑りしてゐて、自分が狂人で無い

ことは、餘りにも確かでは無いか、それを斯うして生涯朽ち果てさせやうとさせられてゐる。どうか同志に報らせて救ひに來るやうにして下さいと書いて、それに僕等の名が書いてあつたので、わざわざ私の所までその紙片を届けて呉れたのです……何しろこんな反動時代です、迂濶り僕等も斯ういふ運動をやつてゐると、僕等までまた狂人にして抛り込まれるかも知れませんね……であなたはどうしても川上の診斷を改めて下さらぬのですか。」

「充分に診察はしませう。ですがさう素人の方の樣に簡單には考へませんからね。」

「では宜敷御願ひします。もう一度お目に掛りますから、よく考へてみてやつて下さい。」

青年は去つた。

下村は一度立つて扉のところまで行つて見送つたのであるが、青年が戸外へ出た頃には、彼は再び元の椅子に來て沈み込むやうに腰を掛けた。

川上のことは、彼も氣懸りにはなつてゐたのであるが、社會の複雜な裏面の一部だから止むを得ないといふ風に、自分で思ひ紛らせてゐたことである。

川上はもう一年ほど前に、警××の依托として送り附けられて來て、下村は職業的に唯受取つて收容してゐるのであつた。寧ろ明晰な頭腦であると感じてもゐた。然し『狂人では無い』と斷言するやうなことは容易では無い。殊に警××からの預り者である。自分が醫學的に見て狂人でないからといふので退院させたとする。それから後に若しも川上が何か大事件を計畫して狂人を裝つてそれを遂行するやうなことでもあればどうであらうか、その行爲の全部は下村の責任となるのでは無いか。

自分が危險を背負ふことにするか？　それとも川上を見殺しにするか？

到底卽決の出來る問題では無い。先刻あの青年の言葉では餘りに強く刺戟されたから、自分は彈かれて冷淡に言ひ切つたのであるが、心の中はこんなに苦しいのだ。

それでも結局これは自分の内部で處理したい、誰にも話すまいと考へて了つた。

彼は茶の間へ行つた、妻は、
「どうかなさいまして。」
と質く。
「何故だ、どうもしないじやないか……今から、出掛けるところがあるから仕度をして呉れ。」
彼は妻に手傳はせて着替へを濟ました。
「どちらへお出でになりまして?」
「一二軒行くところがあるがね」
彼の暗い面持は妻の心にも映つて仕舞つた。幾分の不安さと幾分の同情で、温和しく玄關まで出て、
「御早く御歸り遊ばしました。」
と言ひ足した。
勿論、彼は當があつて出たのではない、代々木の驛まで來て、何處へ行かうかに迷つたが、兎も角高田馬場までの切符を買つた。かなり混雜する電車に乘つて、漸くに席はあつたが、他の乘客は皆平和さうで、此處も堪へ難いところのやうに思はれた。
降りると、何といふことも無しに戸山ケ原の方へ歩いた。
何處で終る不幸さであらう。川上も氣の毒であるが、今の自分も同樣に惱んでゐる。科學に仕へてゐると思つた自分の今日の醜態は何か、科學を否定しやうとしてゐる!
木立の邊りへいつの間にか來て居た。彼は立止つて洋杖の上に兩手を突いて、散歩してゐる人達を眺めた。
たが、何を見てゐるのか記憶には殘らない。川上を逃げさせてみやうかとも思ふし、また捕へられては何の役にも立たぬと考へられる。然し、あゝして同志も盡力してゐるのであるから、反つて、狂人で無かつたといふことが明らかに證明されて、

輿論を喚起するかも知れぬ……そんなことを自分が爲し得やうか？……では改めて、川上は全快したと證明しやうか……そんなことをすれば無論免職されるに相違ない――それからはどうなることであらう、社會運動家に味方して馘首されたのでは再び就職も出來ない、それでは開業しやうか、それにも困難は伴なうであらう！

自分は科學に反き、悪徳者とならねば存在し得ない運命である。そんなに構成された社會の一員であるのであつた。

酒は？　禁酒論者の彼である。今日も飲み得ぬ、醉はない者は冷靜である。不幸に直面しても胡麻化せずに理智で解決しなければならぬことは悲慘であつた。

彼は疎らな木立の中を頻りに歩いた。より優れた考へ方が欲しかつた。だがそれは容易に浮ばなかつた。

歩いて行つた、幾度となく――足跡があつたなら子供の落書のやうになつてゐるであらう、考へを追ひ求める爲に、からだも靜止してはゐられぬ氣持ちである。

足も疲れて、またしても佇んだが、さうしても名案は現はれなかつた、どうして名案などが有り得やう。

彼は逃れることを選ぶより他には無かつた。轉勤の運動をしやうと思つた。可哀さうな川上も棄てゝ行かう、こんな良心を持つて居て、どうして其處の俸給に生きられやう！



一月廿五日夜の職業婦人社新年會は、それは賑かで、文字通り堂に滿つる盛況でした。元氣な姉妹達と共に、假裝行列やかくし藝、さては福引團體遊戯など、愉快に笑ひころげました。新らしいお顔が大分增えて居たことを、嬉しく思ひます。どうかこの次にはもつと〳〵押しかけて來て下さい。

編輯室にて

農村では今ちやうど、いはゆる農閑期に入つてゐる。北國ならば殊に、屋根までも降り積んだ雪に埋められて忙しかつた、秋ごろの生活をまるで夢でも憶ひ返すやうな氣持で、のんびりと、暮してゐる時でもあらう。農村婦人のためには、ゆつくりと自分らが現在おかれてゐる地位や境遇について考へてみるのに、丁度よい反省の冬であるといはねばならぬ。

このとき、本誌が農村の人たちのありのまゝの生活記錄をのせることが出來たことは、愉快である。それにしても考へられることは、かうして原稿紙にものを書いて、送つて下さることが出來るほどの人々は、農村としては餘程惠まれた幸福なんであらうといふことである。

一體私はいつも思ふことであるが、本誌をよんでゐて下さる程の人ならば、農村では――一般の、暗い重い救ひなき農村に女として働きおはれてゐる婦人一般の今日の生活を、自分の責任として、解放戰にまい進してほしい、職業婦人ならば――着物の話や、髮の結ひ方や、映畫俳優の噂やなどをして一日々々を、暮してゐるやうな普通の職業婦人一般の、何ら社會的な生活意義をもたない女たちの無自覺さを、自分の責任としてあくまで強く職業婦人全體の地位向上のために努力してゆかうといふ覺悟で、進んで貰ひたいものである。いや〳〵、われ〳〵は、すでに、さういふ氣持から互ひに勵まし合ひ助け合ひ、協力し合つてゐるのだといはねばならぬ。

議會が初まつた。民政黨や無產黨が、きつさき鋭く政府のひ政のかず〳〵を擧げて、突擊戰を試みてゐる樣を、毎日の新聞紙上でぜひ讀んでゐてほしい。民衆はかうして、あばかれてゆく一つ一つの事實を通して、ます〳〵權力者階級のほしいまゝな暴狀を、はつきりと見ることが出來るわけである。

政治をいつまでも今日のやうに、一部特權階級のおもちやに、任せておいてはならぬ――とは、等しくわれ〳〵の心に痛切にひゞいて來る叫びである。根本的な立て直しをなしとげてゆくべきわれ〳〵の義務を、今こそ感じなければならない時である。

殊に、婦人は未だ參政權、結社權、公民權を許されてゐないだけに、政治的な汚れに染んでゐない。婦人の力が、政界を徹底的に淨化するために有力に役立つ樣に、私たちは今から準備

を怠らず進めなければならぬ。どうぞ、政界の一動一靜に心を留めてみてゐてほしい。特に婦人としての立場から働きかけてゆく、われ〳〵の途をつねに開拓して行つてほしい。（むめお）

「家」の計畫を發表してからの職業婦人社のみんなのもの丶忙しさは格別であります。心を揃へてはげましいたはり合ひつ丶、各方面に向つて、馬力をかけて奮闘して居ります。幸ひに至るところに、私共の熱心な同情者後援者がいらして、いろ〳〵お力添下さるので、みんな感謝を以ていそしんで居ります。（東京市内外の讀者の方々には、出來る丈け直接お目にかゝりたいと讀者訪問を開始しましたから、若しお宅に參上致しました節は、何分よろしくおねがひ致します。）この勢でもう一ふんばつ、早く「職業婦人の家」を完成しなければ、と、私たちの胸は希望にやけつく樣です。みなさん、みなさんももつと〳〵助けて下さい。

「初産のユーモア」をお描き下さつた田中比佐良先生は、昨年末に御愛子をもうけられましたので、これはキット先生の御實感をものされたのでありませう。知らず〳〵ほゝゑまれるではありませんか。先日おたづねしたときもニコニコとほんたうにお嬉しさうでした。どうかみなさんも御一緒に、「お目出たう」を申上げませう。

「來年からは、キット時間を正確に、守りませう」とは、奥さんの素晴しい計劃だつたのに、年は改つても一向改まらないので、最近職業婦人社一同から嚴重な抗議を申込まうと、目下寄寄協議中です。この際被害者は極力應援をおねがひします。（文）

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部　貳拾五錢（郵税一錢）
半年分　壹圓四十錢
壹年分　貳圓八十錢

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和四年一月廿一日 納本
昭和四年二月一日 發行
東京市牛込區市ケ谷本村町四
發行編輯兼印刷者　村山文子
東京市神田區淡路町二ノ三
印刷所　協營社
東京市牛込區市ケ谷本村町四
發行所　職業婦人社
振替東京六四一六〇番

「職業婦人の家」に集まる火の如き共鳴

「家」の計畫を發表しましてから、私たちのゆくところどこでも涙ぐましいまでにうれしく有難い激勵と賛助が與へられてゐます。何といふ力强さでせう。私は今、私のこの心持ちを云ひ現はすべき適當な言葉を知りません……

どうぞ、一日も早くこの「家」が完成します様に、この上ともに皆さん、お加勢下さいませ。

——奥むめお——

永い間の懸案だつた「職業婦人の家」も昨秋の御大典に會つて、急に活氣づき具體化した。

どうぞよき記念として、立派な實を末永く殘したいものである。

さて、家だ！　家だ！　やつぱり金が先に立つ。そこで思ひ付いた募金袋、二十錢也。そればつかしと、お仰言つた方もあつたがなるべく大勢の人の力でしたいと云ふのが奥様のお心、早速大勢の讀者其の他へ東京は云ふまでもなく各地方へまでも可愛い二十錢袋が送られた。

誰も必要を感じてゐた事とて、可愛い袋はあちらからもこちらからも、なつかしい友の名を記して歸へつて來る。事務所の者等、すつかりうれしくなつて、もうぢつと送つて下さるのを待つのがもどかしくなつて來た。そこで年改まると共に私が讀者訪問を初めることにした。まだ出京して間のない私が、讀者の方をお訪ねしてお話しが出來るかしらん、なんだか心もとない。でも皆「婦人運動」の讀者の方だ、さうすれば同じ仲間同志ぢやあないか、と心を取り直すと一時も早くお目にかゝりたくなり先、身近からと杉並町新井方面からおたづねした。東京の郊外は番地が不揃だ。まして土地馴れぬ者の訪問は大變です。

お巡りさんに伺つたり、魚屋さんにお敎つたりしてやつと家が知れると急にうれしくなつて今までの悲しげな思ひはすつかり消えてしまふ。誰も彼も職業婦人社の名刺を出すと意外の喜びに會ふたやうに、もじ〳〵してゐる私を心から歡待して下さる。話し合ふとどちらも「婦人運動」の讀者として少しでも職業婦人社のお手傳ひをしたいと云ふ事に、結滿する。そしてまとめておいて下さつた袋十五枚でも二十枚でもいたゞいて歸る。

中には家庭婦人で、外出の折がなく送金しかねて居たと、訪問した事を喜んで袋を下さる方もあり職業についてゐられる方の留守宅へゆき合せたりもする。昨日も今日もあちこちと散在する讀者の方を訪問した。けれど少しも疲れを覺えない、かういふ風にして地方の方等ともつと〳〵親しく話し合ふ機會が作られるやうに早くなりたいものだと、この頃つく〴〵感じる。早く家が出來て地方の方等をお待ちする事が出來るやうになつたら、どんなにうれしいだらう。

これから毎月御送金下さつたお方の氏名と、口數とをのせてお禮と受取證に代へやうと思ひます。どうぞ、どし〳〵つゞけて募金運動にお加勢下さい。

——入江あき子——

募金袋をよせて下さつた方々

野口きり　野溝よし子　下村敏枝
井浦ひで(二)　井上こと子　加賀美恵
相澤けい　杉山こう　鈴木みさ
無名(一〇)　無名(五)　笠原とみ
川上よし　河野よし　尾澤らく
田中かつ子　田中こう　野美山梓(五)
上田きく子　相澤とり(五)　上野とく子
川上道子　平田時子　吉本こよし
上田一枝　平塚ますみ　奥田きく
廣田ひろ　堀江あい　堀越ぎん
高島ひめ　中川きん(一〇)　中野某
片山はつ　加藤とくよ　服部あい子
屋代あい子　時本いち　河野芳子
上野南枝　野上某(二)　長島そで子
杉本ない　和田きみえ　久我りん
古田よし(二)　古川こん　時田よのえ
文築その子　中尾十三枝(五)　二川美子
佐々木笹子　福永ふく　成田鱗
立川よし　高島みち　奥野はつ子
宇田川登美子　四方田鶴　鹿野山との
相田愛　鈴木りやう　菅原秀

鎌田さち子　吉川花子　和田とし子
賀川はつ　高橋花　川本勝子
吉本みち　吉川とき子　芳賀芳野
相生うめ　松本年　前田まさえ
加藤きみ　花野春(二)　吉本みつ子
吉野たつ　池田やま子　鳥取幸
鈴木とり　堀よし　和氣本(四〇)
廣瀬はつ　高橋初子　桐山政子
島津みつ　畑とみ　田中とよ
川又芳子(二)　二木愛子　鈴木みちの
有働某　福島みつ　吉川とく子(二)
塚本まつ　佐藤秀　村上花枝
菊川かつ　君島その　大塚きん
錦よし　相生君子　高野ゆき(二)
高津敏子　小森その子　細川とく子
川上ちとせ　加賀谷とく　野中雪(三)
佐々木秀　佐々木行(五)　君島幸
吉村はま子　吉植いく　相原こう子
倉田まさ　勝本よし尾　牧野はつ
寺田かん　阪井よしえ　笹川文子
中野松枝　松川とき　吉永あや
小川はつ　鎌田ゆき　川上あい子
三瓶君子　渡邊みち　田中勝代
成田とも子　川田友子　上田桐
井上政　河野球子　大林とみ子

八木田茱（五）　野澤芳　福本光子　福田すゞ子　松永まさ乃　仲よし
西川花　大西松乃　高田保子　齋藤梅子　米山みち　谷口きり
上野山あつ子　和田すゑ　佐々木道乃　玉井信子　平野さち　野美山さわ
小川松子　小見山茱（五）　吉野よし　堂腰たま子　大橋すゞ　丸岡たつ
川本あさ子　田川君子　立野俊子　七山澄子　大川原秋子　村山しげ子
田中茱　佐々川とく　和田あい（二）　田上貞子　福田やま　山北德子
大木すが子　金田房子　川野茱　三ツ山貞子　山內幸子　金子さわ
賀川とり　鈴木喜代（六）　鹽澤縫子　渡邊　金子阿久利　志垣寛
下中彌三郎　石丸重義（三、五）寺村りき（二、五）　北村粂子（四）　楠瀬春美（五）　田村千代子（一〇）
濱川正知（二、五）戸澤村處女團　農事研究青年團（一五）　高橋勝　福永吞吉　福永久壽衛
堀田こまき　和田信子　岩崎花子　大原粂　成岡茂彌　池こまを
池田小ぎく　田木つる子　山崎薫　石丸千粂　前田しげ　佐野豊子
常てるい　桑名桔梗　無名氏（五）　疊口、佐々木　保科、小林　坂巻、清水
植山鶴子　長岡保太郎（五）　柳澤四郎（五）　高島粂　野村ひさ　長田キクヱ
小林龜郎　矢代つね　矢代龜廣　辻村ひさ　藤野銀三郎　神山重辰
矢代君代　長澤賀滿智　西山かね　坪內信子　望月三枝　藤重英子
三井ハル　藤田千代　河野よし子　前川富子　鹽澤縫子（一五）加治時次郎（二、五）
菊池くり（二、五）平林梢（二）　小林駒吉　三留朝六　荻野庫三　須田利八
橋本房子　橋目宏　高島柳子　荻原文次郎　村上登志喜　伊達傳
河野　中村定　神道三保子　木暮カツ子　關口松太郎　保高靜子
栗原梓　佐藤冴子　山北すゞ　宇野節　長谷川菊代　山田富子
清水縫子　岩田せき　瀧波重子　山口さよ子　大久保婦美代　村田秀子
葛貫菊子　田中しづ　小林富子　谷川ヨシ　保母キク子　山下光子
山田きく子　新井光子　高橋藤吉　平林修一　山本春久

（以下次號）

解放群書

□每月壹編刊行
但三冊に一冊は禁止
□壹編壹圓
□送代壹冊拾錢
◆印半額版もある

◇石川世界社會運動史
◇岡氏日本社會運動史
◇佐倉氏「女工虐待史」
◇山内『社會思想解說』
◇英國婦人勞働運動史
◇守田世界革命家列傳
◇尾瀬『革命藝術大系』
◇『地震憲兵火事巡査』
◆終編大家傑作集上下
◆名家隨論集二冊菊千
◆幸德全集上『名文集』
◆幸德全集中『書簡集』
◆中西傑作『武左一揆』
◆神近市子女史傑作集
◆小川未明氏傑作選集
◆新居格氏傑作選集
◆山田清三郎氏傑作集
◆青野季吉隨筆論文集
◆近藤憲國革命運動史
◆『古今東西理想鄉譚』
◆新興消費組合虎之卷

解放

◇東京芝區新櫻田町十九
◇振替東京三六九四四番

解放社

特

◇日記年鑑顧問官◇萬人必携贈答用
◇注文殺倒將絶品◇勞農工商大至急

解放社 廿五錢(送料共) 四年版

大衆年鑑日記

解放年鑑

【日次大要】

1 年 鑑

◇四年東西陰陽曆◇郵便小包電報料◇世界各國度量衡◇金利年令御歷代◇世界大衆運動觀◇日本大衆運動◇大衆團體現勢◇政治經濟組合論◇圖表統計千百頁◇團體名簿約二千◇歷史年鑑二十頁◇

2 日 記

◇新案日記滿壹年◇

3 附 錄

◇大衆法律十原則◇大衆法律年別表◇各種稅則圖解表◇大衆法令約百頁◇必讀書籍目錄表◇

長

◇便利重寶御經濟◇美裝堅牢第三種◇
◇辭典懷中活動的◇机上便覽大衆品◇

半円版

各國社會運動史全集

月刊半圓但群書同樣
三月一回の割で禁止
完讀希望者は要前金

◇以後廣告せず
◇時々禁止の虞
◇完買全納五圓
◇月刊全十二冊

◇英獨佛伊西日支殖民印中北歐洲諸國露◇
◇米南北東亞巴爾幹各國一冊各參百頁內外專門家分担四年完結◇

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
昭和四年一月三十日印刷納本
昭和四年二月一日發行（每月一回一日發行）

婦人運動

第七卷第二號　定價二十五錢